七十一 能畫叙二法眼一例

粟田口法眼隆光 春日社繪所

良賀 源慶 源尊

幷法眼

二ひめ君のさうぞく

うしの日、あかいろのおり物のかうぎ(ら)ぬ、ちずりのも、すわうのあ

こめひとかさね、あをきひとへもしはこきひとへ、こきはかま、あ

かいろのあふぎ、

ごらの日、あをいろのからぎぬ、中巽、あをいろのあふぎ 中巽 する

びたひかみあげまうで

九後奈良院

御湯殿記

天文十一年七月十九日

六月ゐ、十六日よりはじまりて、左中辨ちよくしにて、よべちよく

ふう申されていださるゝ、

廿二日、六月ゐ、する〳〵とありて、左中辨もこのちよくふうまい

らせらるゝ、こうそうはいまだまいらず、左中辨三宮三かしん上

あり、

第百十三

中御門天皇宸翰朗詠詩板哥留多

竪〇、二七五―横〇、二〇〇 百五十一面

和漢朗詠集の詩句を桐板に書し給ひしものなり。

今其の中十二面を拜寫す。

夜向二殘更一寒磬盡、春生二香火一曉爐燃、

野草芳菲紅錦地、遊絲繚亂碧羅天、

氣霽風梳二新柳髮一、氷消波洗二舊苔鬚一、

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』 請求記号 貴箱-11

ガラス使用

春來遍是桃花水、不辨仙源何處尋、
梅花帶雪飛琴上、柳色和煙入酒中、
臺頭有酒鶯呼客、水面無塵風洗池、

第百十四

櫻町天皇宸翰御幼時御製和歌御詠草

竪一、一一—横一、五四　一通

享保十四年四月廿六日廣南の象を天覽ありし時、天皇は御年十歳にしてなほ東宮に在せしが、亦之を御覽じて詠み給ひし御製即ちこれなり、御添削は中御門天皇宸翰なり。

象

めづらしと君もや（三）おもふけだもの（らん）（御はしにちかくきさのすがたを）たくもゐの庭にみるぞうれしき

第百十五

櫻町天皇宸翰御製和歌御懷紙

竪一、五三—横二、一七　一通

端裏書に
享保十五年正月廿四日
内裏御會始
とあり、天皇御年十一歳未だ東宮に在せし時の御製なり。

詠迎春祝代和歌
皇太子昭仁

治れるはるをむかへて國民もなべてにぎはふ御代のゝどけさ

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

第百十六

櫻町天皇宸翰女御尚侍位次勅問勅答御寫

竪〇、五七―横〇、六八　一　冊

後陽成天皇宸翰なる原本を親しく寫し給ひ副本を作り給ひしものなり。

今其の巻尾を拜寫す。

右後陽成院二條前關白昭實公江女御ト尚侍トノ位次何かゝノ由勅問并勅答

以二後陽成院宸筆一寫所則書畢

享保二十年九月廿一日

人皇百十六代孫昭仁

第百十七

櫻町天皇宸翰大德寺開山宗峯妙超國師號加諡勅書案

竪一、五四―横二、二七　一　通

史を按ずるに興禪大燈は花園天皇より、高照正燈は後醍醐天皇より賜ひし國師號にして、大慈雲匡眞は靈元天皇の加諡し給ひしものなり。

敕、大德開祖興禪大燈、高照正燈、大慈雲匡眞國師、禪林知識、釋門俊傑、創二紫阜之精藍一、興二葱嶺之宗風一、德耀二於古一、道振二於今一、茲歲當二四百遠忌一、新加二徽號一、諡曰二弘鑑常明國師一、

元文元年九月十七日

第百十八

櫻町天皇宸翰御製和歌御懷紙

竪一、四九―横二、一二　一　幅

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

寛保四年五月十八日古今集竟宴和歌御會の時の御製なり。

詠寄道祝言和歌

磯城島やつたふる道も神代よりかけてたえせぬあまのうき橋

第百十九

櫻町天皇宸翰御製和歌三首御懐紙

竪一、五三―横一、二三

一通

端裏書によれば延享二年五月廿四日月次和歌御會の時の御製なり。

詠三首和歌

郭公

をちかへりこゝにかたらへひと聲もあだにはきかじやまほとゝぎす

夏月

閨のともさゝですゞしきつき影にこぬあき風やかよふ手まくら

浦松

わが國の神代の風のごとの葉もつきぬためしや和歌のうら松

第百二十

櫻町天皇宸翰歌道御教訓書

竪一、二〇―横一、五八

一通

包紙に

和歌誓狀獻上之節被見候宸翰

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11

ガラス使用

こありて、歌道に對する御訓誡書の御扣なり。

歌道教訓尤大切之義也、其身未熟ニ而、不レ依二貴賤一、今添二削人歌一事、有間敷義也、假令雖二累代家未(來カ)一レ不レ及二其傳一輩、稱二門弟一謾致二添削一義、努々不レ可レ有レ之、右面々雖レ可レ爲二覺悟一儀、猶彌堅可レ愼事、

延享二年十月十八日　（御花押）

第百二十一

櫻町天皇宸翰尊號御辭表

竪一、二四―横一、七二　一通

延享四年五月七日桃園天皇が櫻町天皇に太上天皇の尊號を奉られしに對し、同年七月廿九日御報書を献ぜられ、之を御辭退遊ばされし時のものなり。

伏覽、五月七日詔書爲二太上天皇一、竊謂尊稱過レ實、美譽不レ當、寔瞶二幽栖之素念一、最遠二遜讓之聖訓一、夫父有二天下一、傳二之於子一、子有二天下一、歸二尊於父一、雖二孝子之義備一、人道之極足一而謙情偏切矣、既辭二寶位一、伴二靑雲之侶一、常餐二紫霞一、欲二閑放之樂一、故褫二夫袞龍一、愛此薜蘿一、可下敢享二太上之尊名一致上封戶之公費乎、嘗憐二民間之勞苦一、況於二貢賦之俸料一乎、豈羽林者爲二鳳闕之備一矣、何隨二塵外之遊一哉、所謂守レ儉者德之本也、從レ命者孝之至也、仰冀新主豈違二我言一、請察二卑謙一、早停二崇號一、以協二愚衷一、大孝何以加、并願休二封戶隨身兵仗等之給一、令レ遂二懇懷一、

延享四年七月廿九日　太上天皇昭

第百二十二

櫻町天皇宸翰太上天皇尊號御辭表

竪一、二五―横三、四七　一通

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

御包紙に桃園天皇宸翰にて
仙洞様御製勅筆
御幸の御時分仰られ候
延享四年十月廿七日

こあり、先に一度御辭表を奉られしかごも勅許なかりしかば、再び之を奉られしなり。

功成名こげて身しりぞくは、天の道也と、もろこしのひじりもいへり、昭仁たらちねのかしこき御めぐみをかうぶりて、おほけなき天津日つぎをうけ傳へ、四海の波しづかに、萬の民なびかぬかたなくて、百敷の内に、十こせあまりの春秋をなんをくりむかへし、しかはあれど、おろかなる身のほどをかへりみれば、深き淵にのぞむがごとく、又冨貴しておごるこきは、をのづからそのこがをのこすといふるこことを思ひて、やすみしる名をのがれ、はこやの山にすみかをしめて、塵のほかに遊ばむこす、しかあるを、いますべらぎ、孝子の道をおもむじ、ふるき典にしたがひ、太上天皇

こいふ尊號をさづけらる、嚴親の禮義にかなふこいへごも、たうこきをいこふこゝろざし、今さらいかでかあらためむこ、一度いなみつれば、二度みこことのりして、ゆるし給はず、おごろきて又もたゆるにたへず、たゞねがはくば、みだりに花をながめ、月をもてあそびて、こゝろのまゝに、四時をくり、鶴龜のよはひをこもなひ、老ずしなずのくすりをもこめて、しづかに千歳のたのしをきはめむこいふこことしかり、

むかしこそ今ははこやの仙人のいかでかしこき名をばけがさむ

第百二十三
櫻町天皇宸翰御製和歌御懷紙

竪一、五三―横二、二三

一　通

端裏書によれば寛延三年三月十八日柿本神影前の御製なり。

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

詠山花似雲和歌

雲と見し芳野の櫻千世を經てこゝ葉の花も種ぞつきせぬ

第百二十四

櫻町天皇宸翰和歌御短册

早春山、竪二、一八〇―横〇、一九五
梢猿、竪二、二一〇―横〇、二〇五

二一葉

裏書によれば早春山の御製は享保十四年正月廿二日坊中御當座御會の時のもの、又梢猿の御製は寛延三年四月十九日玉津島社御法樂の時のものなり。

早春山

いこはやもはるはきにけりみなせ山けさはのどかにかすみそむらん

梢猿

山びこもこたへするまで峯たかきこずゑのさるのなにさけぶらん

第百二十五

櫻町天皇宸翰御消息

竪二、〇九―横一、五六

一通

寛延三年三月廿八日後櫻町天皇内親王宣下あり、されば此の宸翰は蓋し寛延三年三月十日のものに係る、御封紙に

近習中披露　（御花押）

とあり。

追申猶後刻參朝、万々可二奏賀一候也

去四日芝山前宰相爲二勅使一參洞、智子王近々可レ有二内親王宣下一、内々

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

叡慮之由、喜悦無レ極候、即后宮内々傳達、深忝思給候、偏蒙二聖恩一候義、
不レ知レ所レ謝候、只可レ應二天氣一候此旨宜有二披露一候也、
三月十日　（御花押）

近習中披露　（御花押）

一九二

第百二十六

櫻町天皇宸翰御歌袋

竪一、二一―横〇、七七

一袋

檀紙もて造られ元結を紐とせられたり、其の表面に歌袋に因める御製を書し給ひしなり。

いたづらになくや蛙の歌ぶくろをろかなるをもおもひいれば
や

第百二十七

櫻町天皇宸翰子日御遊松風入琴繪巻御詞書

一巻

極彩色にて子日御遊と松風入琴の圖とを描けり、筆者明かならざれども繪所の土佐何某をして描かしめ、天皇親らそれに詞書を書し給ひしものなり、後櫻町天皇宸翰御包紙に

繪さん先皇宸かんにて御さんあそばされ候御巻物

とあり。

今其の巻首を拝寫し、全文を擧ぐ。

わが君こしごろ、民をめぐみ、くにをおさめおはします御まつりごと數おほうて、山にのぼり水にたはぶれ給ふおほみ遊も見えざりき、西はをぐら山、秋のもみぢいたづらにその色をうしなひ、

一九三

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

東は紫野のはるの梅、むなしくその香をうしなひ、きしのほこり、
水色きようすみ、山の聲たかうよばふ、かぜは枝をならさず、あめ
はつちくれをやぶらず、世中もたのしけれ、げふのみゆきもあ
ります也、かぎりなき我君の御こくを、老たるは老たるをよろこ
び、わかきは若をよろこぶ、世の中のたのしき事は、けふのみゆき
をためしこすべしこと、つげしめて、その日の和歌、

ねのひして世のさかゆべきためしには　はのこさむ

（繪）

伊勢の齋宮、秋野のみやにわたり給てのち、冬のあらしさむくな
りてのはじめ、はつかなぬかのよかのえさるにあたれり、ながな
がしきよをつくづくしこやはあかすべきと、おもほして、みすの
うちさぶらふをもこ人、御はしのもこに參れるまうち君たちに、
歌よませあそびしたまふ、歌の題にいはく、松聲よるのこころにい
る、これにつけてきけば、あしびきの山したかぜにひゞくなる松
のふかみどり、むば玉の夜半にきこゆるこゝのたもしろさも、み

なひとつにみだれあひ行かよひて、むべもむかしの人、風まつに
いるこいふこゝのしらべを、つくりをきつたへそめけんこなん
おもほしける、したがふかしらのかみ、なつも冬もわかぬ雪かこ
あやまたれ、心のやみはからにもやまこにも、すべてつきなく、御
まへやり水にうかべる殘りのげにおもひあはすれば、いづみば
かりにしづめる身はづかしく思にたかきゝぬがさ、をかにちる
紅葉々を見わたせば、かゝるまごゐにさふらふこさへまばゆ
けれごも、さもあらばあれ、世の人こそきゝてそしりわらはめ、か
けまくもかしこき御かみあはれこもめぐみさいはひ給てんこ
て、今のいにしへをみるがごこく、後の人もみよこて、かきしるし
てたてまつるは、仰ごこにしたがふ也、

夜をさむくこゝにしもいるまつかぜは君にひかれて千世ぞ
ふるらむ

（繪）

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

第百二十八

櫻町天皇宸翰鵜鳥御額

竪〇、九一―横一、九三

一面

此の和歌は後鳥羽天皇の御製と傳へて夫木集に在り、天皇親ら鵜鳥を描き古歌を賛せられしは蓋し瑞鳥にしてよく火を避くとの傳説ありしによるかと拝察せらる。

白山の松の木かげにかくろひてやすらにすめる鵜のこりかな

第百二十九

桃園天皇宸翰御幼時御製和歌御詠草

竪一、二〇―横一、五五

一通

御端見返書によれば寛延元年八月十三日御年八歳の時初めて詠ませ給ひしものにして、御添削は櫻町天皇宸翰なり。

庭松

こしごとに松よりふかく山のはのいろこそ見えて松のこだかき

珍重ニ候

第百三十

桃園天皇宸翰御製和歌御懐紙

竪一、五三―横二、一九

一通

端裏書によれば寛延二年正月廿四日和歌御會始の時の御製なり、時に天皇御年九歳なり。

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

詠鶯有慶音和歌

うぐひすの聲ものごかに梅も咲春をよろこぶ九重のには

第百三十一

桃園天皇宸翰妙心寺開山關山慧玄國師號加諡勅書案

竪一、五三—横二、一七　一通

史を按ずるに本有圓成は後奈良天皇の勅諡號、佛心覺照は後西天皇、大定聖應は東山天皇の加諡せられしものなり。

本有圓成、佛心覺照、大定聖應國師開山和尚、雲門再生、天澤正風、德聲長播二千秋一、道流自溢二四海一、惡辣活手、露二赤體一於龍峰一、微笑眞機、勘二黃頭一於鷲頂一、今當二祖忌四百年一、追感二宗風一、親染二兎毫一、累諡二光德勝妙國師一、

寶曆六年十月十二日

微笑塔下

第百三十二

桃園天皇宸翰神宮御奉納御製十五首和歌御詠草

竪〇、六三—横三、四二　一通

端裏書に

寶曆七年九月十一日

大神宮御法樂

とあり。

今其の巻首を拜寫し、全文を擧ぐ。

奉皇大神宮十五首和歌

遐仁

春

神路山神代かはらで立春の惠をよもにしく霞かも

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

花鳥のあかぬ色音にさそはれてのべにぞくらす春の此頃
山ごりの尾上のさくら咲しよりかすみこめても匂ふはる風

夏

みし春の花のなごりも夏きては若葉しげれる庭の木ぶかさ
はれやらぬさつきのそらになが雨ふるけふいく日をかくらし
わびぬる
あつき日もとけぬ氷室のみつぎ物ゆたけき年のためしとぞみ
る

秋

萩の葉の音づれそめし秋かぜにやがてみだるゝ萩のうへの露
いすゞ川清き流にあきの夜は月もくもらぬ影をうつして
山陰や夕さびしく霧わたるはゝその梢もずぞ鳴なる

冬

今朝のあさけしぐれもよほす山風にさそはれてちる木々の紅
葉ば
和歌の浦や芦べの鶴に聲そへて千鳥もおなじ千世よばふらし

寒けしなあかぼしうたふ本末のこゑすみわたる庭の月影

雑

天照す神の御かげはむかしよりげにわが國の光なりけれ
かしこしな下津岩根にうごきなき宮ゐさだむる神のめぐみは
あめつちとこもにつきせぬ日つぎをばつたへむ末も神のまに
〳〵

第百三十三
桃園天皇宸翰御製和歌御詠草

竪一二〇—横一七八

一通

御端見返書によれば寶暦十年二月七日の内侍所御法樂の時の御製なり、御添削は有栖川宮職仁親王御筆なり。

内侍所法樂

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

早苗

賤の女が笠をならべてうゑわたす小田のさなへの緑すゞしき
夏山の木々の緑を田面にもみせて早苗のなびくあさ風
水鶏
五月やみ何あけよとてよもすがら槇の戸たゝくくゐなゝるらむ
うたゝねの夢もいくたびおどろきぬまきの戸たゝくよはのくゐなに

寶暦十二七法樂

第百三十四

桃園天皇宸翰七夕七遊宸記

竪〇、二〇五―横〇、三〇〇　一冊

御外題にあるが如く寶暦十一年七月七夕に際し七種の遊樂を近臣と共に試み給ひしものなり。

寶暦十一年
七夕七遊内々之儀

（以上表紙）

午刻
有和歌當座七首予出題
禁中七夕　愚詠
今宵はと待えてむかふ星合のかげもへだてぬ雲の上の秋
家々七夕　國榮
さまざまの手向つきせで秋ごとのけふ家々に星まつるらし
海邊七夕　房季
あまもけふしほ馴衣星合の濱の名しるき空にかすらし
織女雲爲衣　爲泰
たつ雲のへだてぬ中のから衣うらなく星や今宵かさねむ

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

織女風爲扇　　兼濟

棚機の袖ふく天の川風をこよひあふせの扇にやする

織女惜別　　盛仲

棚機は天の川なみあくるよにわかれをおしむ袖ぬらすらし

織女契久　　伊光

千々の秋も猶かはらじなけふごとのふたつのほしの中の契

りは

各後日短尺に清書畢

未刻

有二碁將碁一

碁三番

予勝二度

岡崎中務大輔勝一度

將碁

五辻治部卿

園池左兵衛督勝

未刻過

有二楊弓一　半度廿五百矢

予十三本　當數

治部卿十三

左兵衛督十七

中務大輔九

廣橋左少辨無

申刻

有二鞠一座　小座數

予

治部卿

左兵衛督

左少辨

申半刻

花

予

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

治部卿
花山院大納言
左兵衛督
冷泉三位
中務大輔
左少辨
武者小路宮内權大輔
樂（自薄暮至酉半刻）
平調七ッ　各一反
三臺急
五常樂急
林歌
倍臚
合歡鹽
越天樂
鷄徳

予笛
治部卿　琵琶
左兵衛督　太皷
花山院大納言　箏
戌刻
香
七炷香之記（一朝露　二蘭葉　三秋螢　ウ星夕）
本　三三二二ウ一一
梅予　三三二二ウ一一　七炷
葵（花山）　三　二　一　三、
萩（五辻）　二　一　二、
紅葉（冷泉）　三二　二、
竹（岡崎）　無
柳（廣橋）　三　一　二、
芦（武者小路）　ウ　一、
水仙（多喜丸）　三　二　二、

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

藤房卿　三　二　一　三、

香本　左兵衛督

第百三十五

桃園天皇宸翰御製和歌御短册

竪一、二三一横〇、二〇　二一葉

裏書によれば寶暦十二年六月廿六日内侍所御法樂二枚之内と
あるものなり。

新樹

夏のきてやゝ陰ふかくしげりあふみどりすゞしき楓かしは木
す

郭公頻

里わかずをちかへり鳴こゑもなをきゝはふるさぬ山ほとゝぎ

第百三十六

桃園天皇宸翰御製和歌二首御懐紙

竪一、五三一横二、一八　一通

端裏書によれば寶暦十二年七月八日和歌當座御會の時の御製
にして、七夕後朝の御製は別掲宸記にあるものなり。

詠二首和歌

七夕後朝

天のかはあふ夜あけぬとたちかへるけさこそ星のうき瀬なる
らめ

草花色々

咲いづる秋をまちえてませのうちにめづる千ぐさの花のいろ
〳〵

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

第百三十七

桃園天皇宸翰宸記

竪〇、三九―横〇、四九

一冊

表紙に

心おぼえ　寶暦十二年　秋冬

と御署題あるものなり。

今全文を拜寫す。

七月

一日　雨

一内侍所神饌、權典侍參向、如レ常

一有二神拜一

一朝餉如レ例

一於二學問所一對面、參賀、關白左大臣帥宮上總宮前內大臣二條大納言等也

一一昨日留置社司四人之官ヲ申ス、折紙出ス、勅許ト云

一入レ夜盃三獻、於二常御所一如レ例

二日　曇

一有二神拜一

一基名卿次男忠能返二上位記一之事、此四折紙披露、卽聞

三日　晴

一有二神拜一

一有二尙書講尺一

四日　晴

一有二神拜一

一有二御幸一

五日　晴

一史生　式部少丞宗岡經重辭二式部少丞一之事、此四折紙披露、卽聞

六日　晴

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

一於小御所管絃合奏、盤渉調五ツ如例
七日　晴　午前後少々雨、雷一二聲
一二星梶葉之手向如例
一朝餉如例
一於學問所對面、參賀之衆、關白左大臣右大臣帥宮座主宮等也
一有内々當座、七首通題、々者冷泉三位、題七夕迎夜、七夕橋、七夕草花、七夕鳥、七夕絲、七夕管絃、七夕言志、愚詠略之
一當日會如例、題者民部卿、奉行左大辨宰相、題銀河月如船、　愚詠
天川さやかに星の渡瀬もみえてうかべる月の船哉
一入夜盃、三獻於常御所如常
八日　晴
一有當座於學問所、二首通題、予出題、七夕後朝草花色々、奉行權中納言、愚詠
一

第百三十八

桃園天皇宸翰御消息

竪一、二〇―横一、五六

一通

年次を明かにせず、されごも寶暦の初の頃と察せらる、四辻中納言は公亨の事なるべし、同包に之に關聯したる御消息あり、卽ち次の如し、

昨夜者御書被下致拜見候、殘暑之節彌御機嫌克被爲成、目出度存候、遐仁無事に候、御心易思食可給候、抑此度中院中納言、關東下向に付、紫組掛緒免許之事、被仰下畏承候、猶明日中院召候間、可給候、飛鳥井へも御尋之由、委細被仰候、是又承候、何茂宜有披露候也、

七月廿七日　　遐仁

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

御書跪致二拝見一候、殘暑之節、彌御機嫌克被レ爲レ成、太后宮御方にも御障不レ被レ爲レ在候由目出奉二恐悦一候、然明日管絃申付候、夫ニ付四辻少將、家業隨分深切習練候間、賞之義も自二攝政一以二議奏一申達、樂已前に紫組掛緒ニ扇差添可レ給之由、被二仰下一畏承候、如レ被二仰下一候、可二取計一候、尤飛鳥井へも被レ尋候處、無二子細一之由、被二仰下一、是亦深畏入候、何茂宜レ有二言上一候也

七月廿五日　遐仁

近習中披露

第百三十九

桃園天皇宸翰御撰禁中例規御覺書

竪〇、六三—横〇、八六　一冊

朝儀の例規を御留書遊ばされしものなり。今其の巻首を拜寫す。

讓位已前度々被二仰聞一條々

一神宮披露物、即日御沙汰之事

一官位辭退、即日御沙汰、有二子細一被二留置一事も有レ之候事

一關東へ御內慮之分

大臣已上昇進　法中紫衣　堂上養子　醫師法印

臨時公事類　御再興類

一堂上嫁組武邊へ被レ達計、不レ及二御內慮一、神階ハ自二兩傳奏一披露已前聞合ニ而相濟事

一大禮之分御內慮已前三公へ被二尋下一事

第百四十

後櫻町天皇宸翰御製和歌御懷紙

竪一、二三—横一、六四　一通

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

端裏書によれば寛延四年六月十二日内裏和歌御會始の時、緑松臨池といふ題にて詠み給ひしものなり。

きみが代の千とせかさねてみどりなるかげをみ池にうつす松
がえ

第百四十一

後櫻町天皇宸翰御製和歌御懐紙

竪二、二五―横一、六三　一通

端裏書によれば明和二年七月七日の和歌御會の時の御製なり、金銀薄の下繪ある料紙を用ひ給へり。

はつ秋のひと夜を契るほしあひは神代のまゝにいくよかはらじ

第百四十二

後櫻町天皇宸翰倭歌覺悟備要御寫

竪〇、四七―横〇、五五　一冊

御署名の下なる朱印は「日本之朕」と讀むべきものか、御文庫に別に孝明天皇宸翰御複本一本を存す。今其の首尾を拜寫す。

い　制詞
色なる波に　古人――
いきうし　同　祝言ニ不レ詠也
岩代のまつ　同
今はのそら
いまし　同

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

入相のころ　加難詞寺ニよりて詠ベシ
いまさかりなる（り）　同
いつへ　一字ノ秀句聲ノタガヒタル也

（以上巻首）

此本は　智子（御印）
攝政太政大臣内前公政務の事しげきひま〳〵に書あつめられける也
借用して書寫也　奥にも數多有といへ共此本には畧之
明和六年冬

（以上巻末）

第百四十三
後櫻町天皇宸翰假名論語

竪〇、四六―横〇、六七

一冊

包紙に
論語心覺帳
とあり、此の論語は何晏の集解本なり。
今其の首尾を拜寫す。

同年同月廿七日　ろんごりんぎよのじよ。じよしていはく。かんのちうるいかういり。うしようがいはく。ろのりんぎよはぢしうへん。みな。かうしのていしよき事をしるせり。たいしのたいふかこうしやう。ぜんしやうぐんしやうぼうし。しやう〳〵、いけん、およびこ。げんせいら。（ッタヘタリイ）これをつたへたり、せいのりんぎよはぢしうじへん。そのぢしうへんのなかの。せうく。す。こぶるろりんにまされり。ろうやの。をうけい。およびかうこうのやうせい。しやう

（以上巻首）

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

びんしけんがいはく、よくわがためにじせよ、もしわれをまたする事あらば、われはかならずぶんのほごりにあらむ、はくきうやまひあり、し、こむらふ、まごよりその手をこつて、のこふまく、しなん、めいなるかな、此人にして此やまひある事、此ひこにして此やまひある事、

明和七五四改

二三〇

第百四十四

後櫻町天皇宸翰御製和歌三首御懐紙

竪二、五五―横二、二八　一通

端裏書によれば明和七年十月廿四日月次和歌御會の時の御製なり。

さゆる夜は波のたちゐのひまなくもうらはの千ざり友さそふ

第百四十五

後櫻町天皇宸翰黄檗開山隱元隆琦國師號加謚勅號幷勅書案

勅號、竪四、四三―横〇、九三
勅書、竪一、三五―横一、八一　二通

包紙には「明和九年」と表書し内側に次の御書留あり、

黄ばくゐん元百年忌に付、林きうじ宮願にて加號、此通書付つかはす、

うへを中高にてつゝみ、手づからつかはせし也、

二三一

こゐ

風まぜにちるかこみればふりそひてまさごもわかずつもるしらゆき

つれなくもひこりやつるゝ戀ごろもわがうき中に月日かさねて

紙文字何か此こをり也、うつしの一枚也、

明和九年三月十三日

勅號は別に唐紙に書し給ひしもの一通を同包せり。

敕謚徑山首出國師

敕

禪道之興、雖レ緣二其人一、亦必有二其時一焉、有二其人一而無二其時一、則雖レ欲レ興レ之、其可レ得哉、黃檗隱元老和尙、嘗方二元和先皇時一、東來二玆土一、賜レ地開レ山、禪道之盛、莫レ若二其人一、故先皇起レ敬問レ法、乃契二叡慮一、既有二奏對機緣一、特賜二師號一、恰如二斷際之於一大中一矣、豈非二其人之與一レ時共備者一乎、爾後經二五十年一、靈元先皇、亦繼二其聖旨一、而賜二之加號一、以欽二其德一、今玆値二其百年之忌辰一、朕亦深追二慕其遺風一、而雖レ不レ同二其時一、尙如レ逢二其人一、於レ是、敕二謚徑山首出國師一、以鼎揚二三朝之名譽一、後人視二今時一亦由二今人視一レ昔時一、以諭、

明和九年三月十三日

第百四十六

後櫻町天皇宸翰御消息

竪一、二〇―横一、五二

一通

安永三年五月十四日關白近衛內前に古今御傳授あり、其の秋關白に此の御消息を賜ひしなり、包紙に

歌道の事つたへ、かりの文

安永三の秋　めで度し

とあり。

申度事はおい〳〵申すべく候、御用多中ゆへ、御用すき〳〵に御心ヲおなぐさめ、幾久しくよろしく賴入候、歌道はん榮祝忝ねがい存候、めで度かしく、

めで度さ悅かぎりなくぞんじつゞけ候まゝ、一寸と書附御めにかけ候、御覽のち返し給べく候、

當夏古今集の事、する〳〵とつたへ、忝さ筆紙にも言葉にも申つ

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

くされず候うへ、今一事をこ存居候に、是またする〳〵こ何殘る事なく、つたへまいらせ、安心忝さ有がたさ申様もなく候、なをな を幾ひさしくひこしほ、ずい分〳〵御氣丈にて御つたへごも有之候樣、主上にも御傳じゆの御さた共あらせられ、なを〳〵幾久しく歌道はん榮いはゐ願入候、

明和のはじめ、智子 存じよらずも、宮よりつたへ給候ころも、忝き身にあまり、おそれ〳〵有がたくぞんじ居候所、その後、五こせ六こせ以來は、朝暮此事心にかゝり、何こぞしゆびよくめうがにかない、する〳〵こ傳へ度さ、ま事に常々有がたき事、面白キ了、時にふれ候事、用事等ノ時はそれに心うつり候へ共、內心には深ク此事大事こさま〴〵あんじすごし居候に、五月こいひ、今日こ申、何こゞこほりなくする〳〵こ相傳候了、神の御めぐみ第一萬々忝御事、申のべつくされず候、此うへは猶々そなたへ賴入候まゝ、よく〳〵此道に御心ヲそへられ候、萬事たのみ入候、猶また

かしく

關白殿　內々御披見

後櫻町天皇宸翰御奉納御製和歌御卷物

竪〇、四二—橫一三、五〇　一卷

此の御製は恐らく住吉社へ御法樂遊ばされしものこ拜察せらる、柳筥を添へたり。

今其の首尾を拜寫す。

立春

いく千世こいはふこゝ葉の春たちて松にやはらぐ風のゝごけさ

山霞

あさみごり春のごかなる色なれやあさな〳〵にかすむ山まゆ

竹鶯

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

くれたけのよごとにふして朝な〳〵鳴ねのごけき春のうぐひす

野若菜

思ふごちいざ打むれて春の野にもゆるわかなをけふもつまゝし

春雪

さく花とまがふばかりに降つむもめづるほどなき春のあは雪

行路梅

誰もいまよりてぞめづる玉ぼこのみちのゆく手の梅のさかりは

梅風

咲みつるこずゑやいづこ玉だれのうち外にふかき梅の春かぜ

柳露

幾春も契りかけてか青柳のみどりの糸にむすぶ白露

名所松

（以上巻首）

ふかみどりかはらぬ色にさかへつゝこしをつもりの浦の松がえ

山家

山ふかくむすぶ庵の明暮はかけひの水の音ぞ友なる

田家

ゆたかなる御代のめぐみをにぎはへる田づらの庵のしづやたのしむ

羇中衣

たびごろも日かずかさねてゆく〳〵も都の人のいとゞ戀しき

旅泊夢

ふるさとの夢むすぶまもあらいその波打さはぐかぢ枕かな

思往事

さま〴〵にすぎにしことを思ふにはうつゝも夢とをくる春秋

述懐

手向する神もあはれめをろかなるわがこゝの葉の露のかずかず

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

祝言

此神のめぐみかしこく身に思ふことをあまたにあふぐ明くれ

天明四年五月吉日　　智子上

第百四十八

後櫻町天皇宸翰宸記

四十一冊

宸記は寶暦六年御年十七歳の時より安永九年まで廿五年間に亘り、日々精細に書留給ひしものなり、體裁大小一樣ならず。今其の中各所を抜きて拜寫す。

寶暦六年正月ゟの　　智子

日次

（以上御題簽）

女院御所樣ゟ拜領、小袖、藤びしに菊の織物アリ、ひぢりめん、はかまき申候、

十七才

元日

禁中樣へ春の目出度たき文にて申上ル、女院御所樣へいつもの通、春ノ御禮ニ參、御祝共御さかづき參る、女御樣へ春のめで度き文にて申す、御所ゟも御返事參ル、女御樣ゟも御返事來ル、こなたの祝いつものごとし、女院樣より女中衆殘らずこなたへ參られ候はかまにて口祝いたす、その後女院樣へ御禮に參也、供、左衛門、大藏お信な

夕かた過、左衛門初へさかづきつかはす、左衛門初幸まで春の目出たき申上ル、申口へもまいる、おもくろくことひだひと女院樣へ參候時分、いつもの通あげ申候、しまいすみさつそく鏡いはる、そのゝち祝共、朝く御、よみ初、書初、夕かた過詠歌のよみ初いたし候

二日　　禁中樣ゟ拜領　地白きくにしばがき　ひぢりめん、はかまき申候

祝ごもいつもの通、女御樣ゟ春のめでたさに文上る、御返事もさつそく出る、御所ゟ御使にいつもの通ながら橋參られ候、大御乳も

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

參られ候間、女御様ゟおさゑ御使にあげ爲參候、夕かたの時、たち初、ぬい初に付、すい物、九こん出る、

（以上寶暦六年正月一日、二日）

十九日女院御所様御庭へ御幸成、御供いたす、一安伺、よろしき由申上る、駿河守伺、はり上る、細工にいたし、箱上申候、今日日柄よく候ゆへ、ひぞうの人形ごもすぐに箱へ入申候、大藏ゟ出してくれごきれぶんこへも入申候、大藏に鶴のやうのぶんこつかはす、今日法樂の詠草御めにかけ、すぐに御返事下され候、けいこ始の題も下され候、けいこ始今日日日柄よろしきゆへ有也、今日かうすのはなかみ袋、大藏せわにて出來也、シカシけいこ始、今日の所延引にて、近日有也、

（以上寶暦六年二月十九日）

六日御庭へ御幸成、小かうさまへもならせられ候、御供、、、也、

圓滿院様へ御繪御たのみ申入候也、土佐守伺、駿河守も伺、よろしき由申上る、色々細工の物上申候に付、するがの守へはなかみ入、たばこ入二つつかはし候、お信ゟきのふ御禮御機嫌伺、左衛門迄ふみ上られ候也、

（以上寶暦六年三月六日）

廿九日

一今日は日がらよく候ゆへ、院御庭御社へ代參、源中參ル、女院様へ御まな參る、こなたよりも參る、

一今日小ざしきへ攝政召、はかま計也、親王にもだん〳〵御成人の事ゆへ、位ゆづり候事、さたいたされ候様に、ふしん何かごひまごり候ゆへ、何ごそ今よりじやう位のさたよろしき様に、たのみ候由申候へば、いさゐ承候よし、せんそのせつも、しん王十歳ばかりまでご、關東へも申置候事ゆへなかほご今よりさたいたし候はゞ、よき比に成候半、猶申合よろしくせわいたし候半ご申され候、關東返ごうのうへ、おもてむき申出し候事由、た

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

づね候へば、是も次第いまの事ゆへ、猶さくさく申合よろしくせわいたし候半よし申され候、

一女御新殿所の事、今日てんそう諸司代へ申候よし、

一今日知門参内、二品せん下仰出され候ほど也、内義へ召、

一知おん院参内、りんごに對面なし、

一今日りんじに御すゞ参る、おくま参る、

一攝政はじめ庭舟へも行候よし、

一香名の事、攝政知門へも書付遣す、

一來月六日攝政不参の事申され候、

一小番かん定上ル、

一式部卿宮より梅千とせと云名ナリ、つく〳〵し、大すけへちらし文にて参る、

千とせと申梅に付、歌よみ内々にてみせ申され候、

（以上明和二年正月廿九日）

六月一日

一御神ぐら、源内侍まいる、かゝりゆうちきはかま、常御所居、

一内々御はい也、

一さ井参候て、大すけへ申候は、今朝御神ぐらの時、御すゞ上候三度めの御すゞの時、御すゞ一ツ御つくえのうへゝおち候、それに付、だん〳〵ぎんみ候へ共、近比はいつかふさやうの事無候が、さ井上り候時分、白川故二位なご申候に、いつかたよりにても、御すゞ上候に、御すゞおち候は、いかふ〳〵めで度事、いづかたよりにても上候方へ、いたゞかせ候事のよし、毎度〳〵申きかせ候由、御すゞなごも、毎度さやう申置、むかしは御座候事にて、めで度事のよし申入候也、代々はんじやう、天下太平、めでたし〳〵、

一内侍所へ御すゞ御まな参る、こなたよりも御くま御まな参る、

内侍所のもの共、白河三位へもしうぎ参る、

一女院御所へも大すけより申入ル、こなたより御まな参る、あなたよりも参る、

一こなたすい物すゞにてさかづき也、はかま計、

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

一しん王御かた二宮すい物出、さかづきも参る、
一攝政両やくへもすい物出ル、
一女御へもすい物まわる、
一女中へもすい物出ル、
一右の御すゝ御ぶんこに入有、
　けんじの間に入置、
一げんないし上野よりも御くま参る、
一今日参賀、對面（かみあげ、ひとへはかま、）
一青門歸京に付、先一人たい面すみ、今日の參賀の衆出候、
一内義へ青門召、はかま計、對面也、女中男がたしやく也、長はし
一常御所にて、こんさかづき（かみあげ、ひとへ、はかま也、）を堂上へ出す、
　引居申候ゆへ、大すけのさかづきを参る、
一口のもの共、はやし仕舞有、にぎ〳〵也、朝ていはんじやう、世上
　ゆたかに、万民安樂、天下太平、めでたし〳〵、
（以上明和二年六月一日）

廿三日

一朝六つにオキ、しまい濟、毎朝の拜、心念也、（日くう、御く御、）すみ申候て、常御所庭（竹だいのわきに半帖、うしろ屏風、道ゑんごう也、はかまにて拜、南向、ねん佛也、うちき、）
一さん狀上ル、せんぼうかう初、五つ過、四つ前（ムス、）
一夕座、ひる初、八ツ半過比すむ、
　日々二座共掛候て、おもてより申入られ候、出御（かみあげ、うちぎ、はかま、）つくゑの
　うへ、（じゆす、かうろ、）着座、左大臣（香持行タク）、油小路大納言、中山中納言、けご、てん上人
　十二人也、くわしくは別紙に書付有、
一せんゆう寺、大すけ參入候、
一今日の代香、大原前さい相、
一女院様へ御花御くわし參る、
一あなたよりも御くわし折參る、
　方々より見舞有□も有、
一梶井宮對面、常御所（かみあげ、うちき、はかま、）、あいさつ計也、
一櫻町院樣御十七年に付、せんぼうかうをこなはれ候に付、教兒
　八人申付候よし、關東ゟ申まいり、諸司代より申來ル、

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

一御くろ戸へ此間より日々參ル、今日ハ二度參ル、あみだ經一巻、
ねん佛千べん、一巻、ねん佛のおくに歌書付、
櫻町院樣へ上ル、

（以上明和三年四月廿三日）

十四日

一今日日がらよく、今日より三ケ日、内侍所へ御きとう、三部抄い
せ物がたり、一品宮する〳〵と申入られ候樣との御こと也、御
くまあなたへ參ル、用事に付一封、返事も有、
一女院樣より三ケ日御祈とう、内侍所御くまこなたへ參ル、十六
日傳じゆする〳〵とすみ候樣にとの事也、
一親王御かたとく書始也、小御所出御、簾中上段、中段板じき、東面
西方しん王座、帖（三方すいれん、板しとね）、北面南方帖二帖、攝政前關白座、出
御、攝政前關白着座、以後親王着御座の後簾中より出らるゝ、前
くわん白御ふち、攝政氣色有て、ふし原三位進、古文孝經申入ら
れ候、しん王よみ給ふ、ふし原退候て、しん王簾中へ入給ふ、入御、

攝政前關白退也、
一常御所二こんめ天しやく、四町の者祝義に御すゝさかづき御
さらし參る、手づから御くわし遣、
一がくもん所にて兩やく三卿近習しん王の方公家對面（かみあげ、ひとへ、）、
はかま、あいさつ攝政申され候、みな〳〵めでたき申て、座ヲた
つ、上段れん中より出、にぎ〳〵敷、めでたし〳〵、
一今日内々御はいなる、
一方々より悦文參る、御祝ため參る、
一しん王よりしうぎ、こなたゟ長はし使、攝政前くわん白まな、奉
書にて參る、

十五日

一ふし原三位へ位かいすいじよ、二位、
一小折かみ、地下六人參候まゝかく、
一内侍所へ女院樣ゟ（三ケ日御すゞ、今日は御くま之由、）一品宮御祈とう、こなたゟ
三ケ日、今日も御くまあなたへ參る、

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

（以上明和三年五月十四日、十五日）

五日

一月次のだいふれさゝるゝ、清かん寺中納言也、

一攝政參らるゝ、小ざしきにて女中の事申わたさるゝ、當冬じやう位に付のこし置るゝ、

禁中の女中の分　大すけ
　　長はし
更に召して　大夫のすけ
更に召して　いよ
更に召して　上野

みな〳〵よくつとめ候樣の事、申わたさるゝ、幾久しくめでたし〳〵、

大すけ申の口にて申わたさるゝ、院中へ召つれ候女中、大ち大和の外、平さい相のすけ、あぜちのすけ、權すけ、新すけ、衛門のないし、源ないし、はうき、たんば、いづれも小ざしきへ參、御禮有、よくつとめ候やうにの事、わかきものにもくわしく攝政申きかさるゝ、兩上らうの事は攝政申さるゝ、

一あぜち衛門にはくわしく申きかさるゝ、攝政門りう也平さい大すけかくわしく申さるゝ、

一をか事は代々よくつとめ候、きん勞に付、院の中ろうにて召つれ候事、

一御代始御用共多、かうしやの人々御無人ゆへ、しばらくは禁中へかし進じられ候事に申わたさるゝ、

一平さい相必何の心づかいなくつとめられ候樣に攝政申わたさるゝ、

一山しなちご參る也、

（以上明和七年八月五日）

六日

一今日春日祭さん狀上ル、

一攝政へみせ候きよき歌の相だん文こかへさるゝ、

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

一大すけもつて廣はしへ内々相だんの事有、攝政多年のきん勞、當冬〻の御代にて、當職三代つゞめられ候、まれなる事、ことに當代九ケ年がうちも、何やかや一しほの一しほのきん勞、平日せい出しつゞめられ候事故、そのきぼの有やうにゞも、何も思ひつきなく候、加增などの心づけあるやうにいたし度、さ候へば、子そんにのこりてもきぼのあらはれる事ゆへ、ごふそさやう成候やうにゞ思ふ事を申つかはす、よろしく關東へ申つかはし候やうにいたし度むね申され候間、廣はしも御尤々々の事、さぞ忝に候半、何ゞぞ思しめしすみやかにすみ成り候やうにて、内々存寄くわしく申候、

一歌道ノ事に付ても内々申聞せ置候事有、

一はいぜん采女はじめ申出す、

一御手はじめ十六日、

一たゝみがへ十七日ゞ申出ル、

（以上明和七年十一月六日）

廿二日

一けいごこげん、ぢん有、さん狀上ル、見に行、辰のこくはじまる、上卿、左大臣、さん議新さい相中將、そのほか諸やく書付有、奉行頭辨也、

一女院樣〻かも下上、御れう、北野御ふだ共參る、

一よし田へも御祈ゞうまもり下され候、候、

一攝政御用多候故、猶々氣丈につゞめられ候樣に、御すゞ參る、御くまも參る、明日參る也、小ざしきへ召、鶴の水入進上、

一子まつり有、四辻參る、いつものごとくこと有、

（以上明和七年十一月廿二日）

廿六日

一和歌御當座始也、四門主參ル、御みやつるの繪のめづらしき形の物、中に人形箱入上候、

一參候て御座也、だいゞも關白へ相だん、たんざくしたゝめ候、

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

一御せい詠歌共見て返上候、
一藤うつくしき事のやうすに付、何かせわごもかく、安薬もたべさせ候、よろしきやうす、めでたし〳〵、
一御所〻うつくしき物被(御まな)下候、
一女御へ人形進上、

廿七日
一藤うつくしき事に付、今日〻めで度下ル、久小路方へ也、いかふよろしく候由、おゝつけする〳〵こめでたし〳〵、
一吉田へも一七ケ日祈こうたのむ、
一御所〻御當座始うつし被下候、
一御會始うつし奉行万里小路〻上候、
一くわん東使明日參内候の由、參院うかゞふ、同日こ仰出す、たい面□□□うかゞひ(カ)入れ候也、

(以上安永三年正月廿六、廿七日)

廿八日
一今日のめで度共例のごとし、
一吉田よりのはらへ大輔〻久小路方までせい安よりいたゞかせ候、
一藤式部めで度祝候て、せう〳〵の人形つかはす、
一吉田〻御祈こうの御まもり大納言へつかはす、
一内々祈こう所〻參候はらへ大輔〻久小路方へ文被下由、する〳〵こよろしきやう、めでたし〳〵、
一大すけ夜に入參られ候、冷泉入道〻申候、めで度用事也、
一今日關東使たい面、何か例のごとし右府も參候、
一關白へ文こ御所へ參る、うちへ花もつかはす、
一御所〻勅書、此間のくわいし御かへし被下候、
一御(元文)うつしも返上する、
一こよひ(カ)〻神事入、御隣も一寸こ參候、

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

廿九日

一勅書被下候、御返事も申入る、御内々ばんぐみ下され候、
一藤見舞に大輔參ル、する〳〵とよろしきやうに、めで度あがり
候やうにと祝めでたし〳〵、

（以上安永三年十一月廿八日廿九日）

第百四十九

後櫻町天皇宸翰御製和歌御短册

社頭松、竪一、二一〇—横〇、二〇五
網代、竪一、二〇〇—横〇、一九五

二一葉

裏書によれば社頭松の御製は寶暦十三年八月廿五日、網代の御製は文化十年十一月廿五日、何れも聖廟内々御法樂の時のものなり。

社頭松

千世かけてあふぐ北野の一夜まつめぐみあまねく猶もさかへむ

網代

もる人の袖さむからしあじろ木によするぜ木のはもこほる河かぜ

第百五十

後櫻町天皇宸翰御製和歌御竪詠草

竪一、四〇—横一、八九

一通

年月を明かにせず。

智子上

國民をめぐむまことを神やしる聖の御代ぞさかへますらし

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

第百五十一

後櫻町天皇宸翰歌道御教訓書御寫

有栖川宮職仁親王の御筆なる歌道御教訓書を親ら寫し給ひて指南車こし給ひしものなり。

今其の首尾を拜寫し、全文を擧ぐ。

夫和歌は天地自然のをしへにて、すなほなるを本とす、しかるに初學の輩、其すなほなるべき事をわすれて、一ふしある事をこのみ、徃古よりかつてみをよばぬめづらしき趣向をこねがひ、あるは中古以來の人の面白よみなせる詞をこうらやみ、その詞にのみ心をうばゝれて、趣向を後にし、あるは思慮なくして古事本歌などをとり用度思ふ、かるがゆへに、新造花麗といはむにも過て、

其こゝろ詞こゝはりなき事、やゝもすれば出來たるなるべし、扨題なども隨分こたやすきをとり得て詠ずべし、初心のうちむづかしき題は趣向もこゝのふらず、稽古にならざるなり、既藤河百首を二條家にては難題百首こいふ、先賢すらかくのごとし、よく〳〵題の義も思辨べし、たゞ情者性之動也、寂然不動、是性也、感而遂通、是情也こいへり、又先賢歌をならふは心をならふ也こいひて侍るにや、其心性をたゞしくして、情の感ずる處をよみ出し侍らば、自然によき事はいできたるなるべし、かやうに申侍らば、初學のこゝろにて、古人の歌にいさゝか其情たがはじ、夏あつく冬さむしこいひて侍らんは、赤子の情もおなじ事にて、二はあるまじ、いかゞはせむこ思ひまどふべし、されどそのあつきさむきをこかくいひはべるうへにこそ、さま〴〵の意味の侍るなり、たこへば、人々の面躰同じ事なるはなきがごとし、よく〳〵工夫して、先賢のをしへをあふぎ、ひたすら心をすなほにして、詞をやすらかに、よくきこゆるやうによむべし、秀歌はもこよりすなほなるうちにおもしろきにて侍る也、八雲御抄にも、詮ずるこころ、こゝ

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11　　ガラス使用

葉をつよくて、えむに風情をもこめて、すぐなるべき也こあそばしはべる、かへすぐ〳〵も、すなをほなる處專一にまなびて侍らば、自然に一力はいでき侍る事になむ、つねぐ〳〵心をこゞむべき書は、

一三代集勿論熟覽すべし、代々の先達もこれらの集にもこづかずこいふ事なし、

一伊勢物語、其情詞直にして、猶甚深之義あり、源氏物語、准之

一定家卿三部抄、あふぎて信ずべし、

一八雲御抄、殊用意部、毎月抄等、熟覽なくては不叶義也、

一詠歌一躰、能々み侍りて製詞加難詞等も覺悟すべし、

一新勅撰集、よく〳〵みるべし、惣て古歌はよくきこゆるこ思ふを、其情其詞其風躰をくりかへし、數反あぢはふべし、甚深の意味のいでき侍る也、

一家集にては、爲家卿集、尤優美なり、ちかくは草庵集、頓阿法師が歌也此作者はふるくいひふれたる事を少引なをし、あたらしくよみたる也、かやうの事をこそ一段こよきこはいひ侍らめ、聚雪集、逍遙院詠也、近代の堪能、無二比類一歌ごも也、よくく〳〵心を附てみるべし、まこごに二條家の眼目こすべし、

職仁親王眞筆寫

智子

第百五十二

後桃園天皇宸翰御製和歌二首御懷紙

竪二、五四—横二、一八

一通

端裏書によれば寛延三年三月廿四日月次和歌御會の時の御製なり。

詠二首和歌

櫻

のごかなるわが九重のさくら花盛ひさしく見るぞうれしき

欵冬

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

花ちりて春の暮行まがきこて口なし色にさける山吹

第百五十三

後桃園天皇宸翰御製和歌御懐紙

竪一、五五—横二、一九　一幅

端裏書によれば明和六年正月廿四日内裏和歌御會始の時の御製なり。

詠鶯有歡聲和歌

皇太子英仁

九重のみぎりのまつにうつりきて千ことせを契るうぐひすのこゑ

第百五十四

後桃園天皇宸翰御製和歌御詠草

竪一、一六—横一、七三　一通

包紙によれば明和七年三月九日和歌御當座の時の御製なり。

見花　英仁

ながめつるこずゑは雪の花ざかり色かふかめてあかぬ木のもと

さかりなる花のこずゑをあかずみるにほひえならぬにはの春風

第百五十五

後桃園天皇宸翰宸記

竪一、〇九—横〇、八一　一冊

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

表紙に
安永四年（自正月 到十二月）
こあり。
今其の巻首を拜寫す。

正月　四方拜、臨期無レ之、內侍所御神供、藤內侍參、於二四町之間一祝有レ之、一日雨、之、スエ袴ニテ　イハウ也、大床子於二常御所一ニ御服著、左衞門督、前按察使清涼殿ヘ渡ル、男方、劔、久世中將、裾、資矩朝臣大床子ノ座ニツク、立レ箸、座ヲサル、西面マデ　渡ル、陪膳頭辨、手長裏松辨、女中方ニテ　臺盤所江渡ル、朝餉、陪膳新宰相典侍、手長勾當內侍、役送伊與、立レ箸（當番）、直衣單打袴也、常御所江渡ル、女房也、於二學文所一ニテ兩役近習對面、スエ袴也、常御所ニテ　攝家中年始禮、孟二獻有レ之、對面、陪膳、男方櫛笥前中納言、手長葉室辨、役送六位藏人、參賀江ノ　陪膳、內々ノ殿上人、直衣也、入レ夜於二常御所一レンタイ請取、孟二獻、次ニ上段ニテ　强供

御、一獻、直衣單袴、次ニ三獻、各女中三獻メ、男方女中ノアトニ女御ノ上郎孟有レ之、三獻メシヤク、スエハカマ也、節會（雨儀奏聞）陣散（有レ之）狀、公卿、左大臣（臨期不參）、右大臣、內大臣（臨期不參）、西園寺大納言、新大納言、鷹司大納言、權中納言、中御門中納言、今出川中納言、持明院宰相、左宰相中將、治部卿、少納言、光宣、朝臣、辨、謙光、次將、左、重嗣朝臣、紹季朝臣、通武朝臣、公理朝臣（臨期不參）、隆良朝臣、右、公逵朝臣、實駿朝臣、隆師朝臣、宗董朝臣、實祐朝臣、奉行、烏丸頭辨、劔勾當內侍、

第百五十六

後桃園天皇宸翰御製和歌御續懷紙

竪一、四九―横二、一四　一幅

安永六年九月九日重陽和歌御會の時の御製なり。

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

詠白菊戴露和歌
をく露のひかりもそひてけふことにめづるまがきのしらぎく
のはな

第百五十七
後桃園天皇宸翰宸記

竪〇、九六―横〇、六四　一冊

表紙に
安永七年四月五月
六月　議奏江言渡留書
七月後七月八月
九月　此四ツ月有」之
とあり。
今其の巻首を拜寫す。

八日
一見季朝臣辭官之事一紙
一從(御隨身)六位上紀淑範辭官返二上位一記之事一紙、披露、四ツ折也、二紙トモ出
シ聞ト言出ス
一今月月次會、奉行、右兵衛督題寄書上ル、巻頭之事幷人數等、四ツ折、
伺、人數如」例、故伺之通、巻頭ハ巡番ヘ賜ル、題ハ夏夜　對」萩　谷氷　書
付出ス寄書モ出ス　一々如」例
九日
一額字二箱　被」納候由、昨夜言出ス
一明日字書擔子、論語一箱、被」納候由言出ス、年(御記)中行事一合取出ス
由言出ス
一信擔子金物直シニ議奏へ出ス
十日
一大嘗會二合、公卿勅使一合、愚昧記正記　一箱各取出ス

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

第百五十八

後桃園天皇宸翰御製和歌御詠草

竪一、一六—横一、七一　一通

御端見返書に

安永八年五月廿二日小御所當座

とあり、御添削は後櫻町天皇宸翰なり。

當座

苗代

ゆく春（時きぬと）にたねまき分（そめ）てこゝかしこひくしめ（ますらおが）かすむ（引まつる）小田のなはしろ

せき入しながるゝ水にしめはへてゆたかにみゆるをだの苗代

第百五十九

後桃園天皇宸翰御製和歌御懷紙

竪一、五四—横二、二〇　一通

端裏書によれば安永八年七夕和歌御會の時の御製なり。

詠七夕夜涼和歌

すゞしくもくるゝ夜まちてたなばたのあふせにやふくあまのかはかぜ

第百六十

後桃園天皇宸翰御製和歌御短册

待月、竪一、二一—横〇、一八
松蟬、竪一、二一—横〇、二一　二葉

待月の御製は年月不明なれどもなほ東宮に在せし頃のものに

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

して、松蟬の御製は裏書によれば安永八年六月廿七日内侍所内々御法樂二枚の内の一葉なり、何れも御題は宸翰にあらず。

待月

秋のよのむかふそなたの山のはにいづるぞをそき月ぞまたるゝ

英仁

松蟬

立よればこずゑにせみの聲そへていとゞすゞしき松の下かげ

第百六十一

後桃園天皇宸翰論語序

竪一、六四―横一、〇八

一通

天皇寶算廿二にてましませば、此の序を寫し給ひし御年代は蓋し拜察するに難からず、附訓は朱書を用ひ給へり。

論語序

叙曰漢中壘校尉劉向言魯論語二十篇皆孔子弟子記諸善言太子太傅夏侯勝前將軍蕭望之亟相韋賢及子玄成傳之齊論語二十二篇其二十篇中章句頗多於魯論琅邪王卿及膠東庸生昌邑中尉王吉皆以教授故有魯論有齊論魯恭王時嘗欲以孔子宅爲宮壞得古文論語齊論有問王知道多於魯論二篇古論亦無此二篇分堯曰下章子張問以爲一篇有兩子張凡二十一篇篇次不與齊魯論同安昌侯張禹本受魯論兼講齊說善者從之號曰張侯論爲世所貴包氏周氏章句出焉古論唯博士孔安國爲之訓說而世不傳至順帝時南郡太守馬融亦爲訓說漢末太司農鄭玄就魯論篇章考之齊古以爲之註近故司空陳群太常王肅博士周生烈皆爲義說前世傳受師說雖有異同不爲訓解中間爲之訓解至子今多矣所見不同互有得失今集諸家之善說記其姓名有不安者頗爲改易名曰論語集解光祿大夫

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

關内侯臣孫邕光祿大夫臣鄭沖散騎常侍中領軍安鄉亭侯臣
曹羲侍中臣荀顗尚書駙馬都尉關内侯臣何晏等上

第百六十二

光格天皇宸翰阿彌陀經

竪一、七七―横七、七八　一　巻

附札によれば天明五年十一月九日後桃園天皇御七回忌に當り御供養のために宸筆を染め給ひしものなり。

舍利弗於汝意云何何故名爲一切諸佛所護念經舍利弗若有善男子善女人聞是諸佛所說名及經名者是諸善男子善女人皆爲一切諸佛共所護念皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提是故舍利弗汝等皆當信受我語及諸佛所說舍利弗若有人已發願今發願當發願欲生阿彌陀佛國者是諸人等皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提於彼國土若已生若今生若當生是故舍利弗諸善男子善女人若有信者應當發願生彼國土

舍利弗如我今者稱讃諸佛不可思議功德彼諸佛等亦稱說我不可思議功德而作是言釋迦牟尼佛能爲甚難希有之事能於娑婆國土五濁惡世劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁中得阿耨多羅三藐三菩提爲諸衆生說是一切世間難信之法舍利弗當知我於五濁惡世行此難事得阿耨多羅三藐三菩提爲一切世間說此難信之法是爲甚難佛說此經已舍利弗及諸比丘一切世間天人阿修羅等聞佛所說歡喜信受作禮而去

佛說阿彌陀經

天明五年十有一月九日　兼仁謹書

第百六十三

光格天皇宸翰新宮成後賜德川家齊御製五古

竪一、一五―横七、一三　一　巻

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

寛政二年十一月所謂寛政內裏御造營落成の後、其の功を賞し給ひ、將軍家齊に賜ひし御製にして、夙く太田南畝著半日閑話幷に飯田忠彥著野史等に謹載せり、但し前者には「唐紙に草書にて遊ばしけり」と註せり。

新宮成後手書賜二源大樹一

遙慕周文囿、不レ羨漢武臺、舊章一是率、新築本非レ催、百工忽告レ竣、整レ駕自レ東回、拭レ目九重裏、九重實美哉、兩殿應二規矩一、四門總崔嵬、燕雀繞レ簷集、櫻橘狹レ階栽、豈其爲二逸豫一、講レ禮共徘徊、委レ佩群僚會、將レ幣九州來、素心既已足、春夏感二鹽梅一、欣然歌思動、乙夜蕩言裁、

第百六十四

光格天皇宸翰女房御月次御組題

竪一、一〇—横一、五二

一通

寛政三年二月廿八日女房御月次和歌御會の御組題なり、花月幽士は天皇の御雅號にして、此の外蕉雨軒、壺天園、修焉齋、栖鶴洞山人等の御號を用ひ給へることもあり。

十五首

霞中花　一品宮
花映日　宰相のすけ
野花留人　尹宮
心在山花　上野
松間花　桐丸
河上花　督のすけ
海邊夕花　大すけ
名所花　女一宮
挿頭花　河內

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

依花待月　衛門の内し
花下忘歸　一品宮
馬上見花　新内侍
古寺曉花　尹宮
隣家花　靈鑑寺宮
落花入簾　朕

寛政三年二月廿八日
女房月次之寄書　花月幽士

第百六十五

光格天皇宸翰宸記

堅〇、六八―横〇、四四

一冊

表紙に
寛政十年（従二七月一日一到二九月廿九日一）

日次案
とあり。
今其の一部を抜きて拜寫せり。

十六日丁未晴
神佛所作如レ例
關白參入面語
依二中丁一於二聖像一供物如レ例（尤着二直衣一）
於二小御所一有二講尺一
毛詩（大雅棫樸篇）　前菅大納言
尚書（益稷篇）　前菅宰相
同（堯典）　侍從三位
臣軌（誠信章）　勘由（解）（由）解長官
禮記（中庸章）　右大辨
春秋（隱公五年）　式部大輔
古文孝經（天子章）　久量朝臣

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

禮記緇衣篇　長親朝臣
御註孝經能孝行章五刑章　尚長朝臣
古文孝經序　師賢朝臣
毛詩關雎章　爲顯朝臣
論語八佾篇　俊長朝臣
御註孝經孝治章　在經
講訖有レ詩、各賦二月色徧二秋露一以レ光爲レ韻　右大辨撰進也
於二小座敷一有二當座一月十首、出題冷泉前中納言、委曲註二于別記一、
（以上寛政十年八月十六日）

十三日甲戌雨、入レ夜休止、月朧々
神佛所作如レ例
關白參入面謁
午斜於二學問所一代二有當座一、月廿首、出題權中納言、奉行冷泉前中納言、
委註二于別記一、
柳營女子格姬　北方爲二養女一之旨言上

甘露寺前大納言依二所勞一、議奏役雖二辭申一召留、寛々加二保養一、全快之上、
可二出仕一、厚仰レ之了
新宰相中將辭二兩官一之事、均光朝臣奏、依レ請之旨、直仰了
裏松入道大夫固禪、造二內裏差圖一、用繁々勤仕、以來每事勤例等出精
速注進、加レ之大內考證一合獻レ之、謂レ彼謂是、有識博聞、殊感賞之間、從レ
今生涯、年々金三拾兩宛可レ賜之事仰了、武傳沙汰之
入レ夜於二常殿一一獻、次於二中殿一覽、月如二例年一
（以上寛政十年九月十三日）

第百六十六
光格天皇宸翰御消息　一通

竪〇、五七―横九、三六

後櫻町天皇の御教訓に答へ給ひし御消息にして、寛政十一年七月御年廿九歲の御時に當る、御封紙は後櫻町天皇宸翰にて

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

勅書有がたき　ひつじノ七月廿八日
御こまゞ〳〵

よく〳〵いたし置候事
と書させられ、且つ封目には「智」と署し給へり。
今其の首尾を拝寫し、全文を擧ぐ。

返々まだ〳〵書付度事候へごも、あまり〳〵、先々かくのごとく候、何分〳〵御すい覽之事、願入爲」參候、私いよ〳〵氣丈〳〵、けふは當座にて候、用心ましく〳〵御安心候、かしく、

日々きびしき殘暑之處、ます〳〵御機げんよく〳〵、扨々々めで度〳〵忝き〳〵御事、猶また萬々御用心〳〵の御事、第一に願上爲」參候、さては詠草伺置候まゝ、いつにても〳〵〳〵御きらひしだい御すきさまに宜しくねがゐ入爲」參候、誠に昨夕は法樂詠草早そく返し給り、畏々入存爲」參候、其ふし御書中、扨々々々々々々々有がたき御心せつ之仰ごも、實々々々々々々心中有がたく〳〵存爲」參候、尤仰之通、人君は仁を本トいたし候事、古今和漢之書物にも數々有」之事、仁は則孝忠、仁孝は百行の本元にて、誠に上なき事、常に私も心に忘れぬ樣、仁德ノ事を第一ト存じ爲」參候事候、ここに仰ごも蒙り候へば、猶更に存候事、とかく自身計にてはつい心もだるみ候事、か樣に仰有」之候へば、其度ごとに心もすゝみ、實々々々有がたき〳〵事、とかく人は身勝手に成安き物、こゝは彼恕ト申字ノ所にて、恕之字は俗に申、我みつめつて人のいたさをしれト申字にて、則此恕が仁ノ字にも通じ、又誠ト申義にも相成候事、何分仁ト誠トに相極り候事、仰之通、身の欲なく天下萬民をのみ慈悲仁惠に存候事、人君なる物ノ第一ノおしへ、論語はじめあらゆる書物に皆々此道理書のべ候事、則仰ト少しも〳〵ちがいなき事、扨々忝く〳〵〳〵存じ爲」參候、猶更心中に右之事ごもしばしも忘れおこたらず仁惠を重じ候はゞ、神明冥加にもかなひ、いよ〳〵天下泰平ト畏々々々入爲」參候、右之通色々ト書過候樣にても、中々心中に存候ほごは、筆紙に不」盡事にて候、何分御推さつ之事願入存候、右申候ごとをり、とかく折々は仰いたゞき候事、はげみに成、實々々々々々々御うれしく忝く〳〵存爲」參候、

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

猶又已後之所願々入存候、實々昨夕之御書中、御心せつノ御實意ごも、心中にてつし候事にて候、猶々御機げんよく御長久、度々有がたき仰も承り候事と、めで度〳〵存上爲參候、誠に中宮事、いよ〳〵めで度様子、扨々々々々々年來ノ宿願成就、大悦ノ事にて候、此に付候テも、何事も滿ればかくるノならひに候へば、只々大悦ばかりにては相すまず、か様に大めで度事有之候も、ひとへに神々ノ御加護ト存候、猶又萬事をつゝしみ候事十分なれば、必かくごと有之ト申事を心中に不忘、敬神正直仁惠を第一にいたし候へば、何事も安穩ノ道理に候へば、右之心え第一トのみ存爲參候事にて候、前文申通、仰之通、何分自身を後にし、天下萬民を先とし、仁惠誠仁ノ心、朝夕晝夜に不忘却時は、神も佛も御加護を垂給事、誠に鏡に掛て影をみるがごとくに候、神も佛も大慈悲ノ御事候へば、色々のわざわひ有之候は、皆々此方ノ心中によこしま有之、此方ヨリ何事も出來候事候、くれ〴〵も正直仁惠誠信第一之事にて候、前文之通、御厚意御念比之御書付候、實に〳〵有がたく〳〵存爲參候事候、むざ〳〵長々しき書様ながら、心中に存じ上

候あらましを、心にうかみ候に隨ひ、亂筆ながら書付爲參候事候、めで度かしく、

又申候、扨々日々雨をねがひ候事、今朝も拜ノ時、又内侍所にても誠心に祈り申候事にて候、何分〳〵衆民ノ爲、偏に〳〵〳〵〳〵一雨ノ御惠をのみ祈り〳〵入爲參候事に候、かしく

必々御返事ニ不及、昨夜ノ畏りの御返事にて候、

御内々

言上

兼仁

第百六十七

光格天皇宸翰御製和歌御懷紙

竪一、四三―横二、〇三　一幅

文化五年正月廿五日和歌御會始の御製なり。

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

詠迎春祝代和歌

花ごりのいろねにうつる言の葉におさまれる代の春はしるしも

第百六十八

光格天皇宸翰御消息

一通

文化十四年三月天皇皇位を仁孝天皇に譲り給ふ、其の夏天皇は仙洞に在して、此の御追懐の御製を仁孝天皇に贈らせ給ひしなり。

御園の月を御覧じて御製あり、又御前に侍らひし殿上人又うわ童など詩歌つかうまつりしよしを承りて、

思ひやるなれし雲井の夏の月御溝の水もさぞなすゞしと

月もしれからのやまごのここの葉に君がこと葉もそへし光を

のがれすむ洞のやま人みる月も雲井の空もへだてなき影

などゝ心にうかびたるを書したゝめ候て、御覧に入候事、

棲鶴洞之山人

二葉

第百六十九

光格天皇宸翰御製和歌御短册

竪二、二二—横〇、二〇

鶯知春の御製は裏書によれば、寛政二年正月廿七日當座御會の時のものにして、大師様の書風にて書し給ひ、氷解の御製は裏書によれば、寛政七年六月十七日内々當座御會の時のもの二葉あるが中の一にして、冷泉様の書風にて書し給へり、二葉ともに御題は宸翰にあらず。

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

鶯知春
色かへぬ竹の茂みにうぐひすのはるつげてなく聲のゝどけさ

氷解
のどけしなこほり吹こく春風にさゝ波みゆるけさの池みづ

第百七十
光格天皇宸翰御製御詩草　竪一、〇九―横一、五五　一通

年月を明かにせず。

歸二山居一　韵用二山字一
偶曳二長笻一下二碧山一、風流試問騷人關、喧々何羨世塵事、徐誦二太玄一振レ袖還、　壺天園脩焉齋

第百七十一
光格天皇宸翰御製御詩草　竪一、一〇―横一、五七　一通

年月を明かにせず、唐様の書風にて書し給へり。

孟夏眺望、分二得一先一
薄暮幽亭開二雅筵一、四山呈レ緑入レ看鮮、最憐簾外清風過、更賞峯頭孤月圓、

第百七十二
光格天皇宸翰御消息　竪一、〇八―横一、五五　一通

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

御表書に

御請　　兼仁

とありて、後櫻町天皇に奉答し給ひし御消息なり、年次を明かにせず、第二封紙は後櫻町天皇宸翰にて

正廿六　勅書

社がためで度事共有とあり、別掲御趣意書と共に賀茂石清水兩社臨時祭御再興に關するものなり。

御きげんよしとの御沙汰、扨々忝き〳〵御事にて、猶また萬事御用心〳〵とも願入存候、

一扨關東へ給ものゝ事、申入候事、御滿足〳〵のよし、忝さ〳〵、いよ〳〵大樹へ給り候物、御見臺に御治定のよし、承爲レ參候、夫に付、何ぞよろしき〳〵かた有レ之候はゞ御覽に入候半哉のよし、承り申候、格別よろしきかたには無レ之候へども、先々二通入レ申

御覽レ爲レ參候、尤目元に傳來のにて、此内いづれとても思しめし候次第、御治定候半哉ト存上候、猶二箱後刻さし上申べく候、

一扨亞相御末廣十本四季雜書申候、其御所御もちのかたに候半哉のよし、至極〳〵〳〵御よし〳〵ト存上爲レ參候、未幼少にも候へば、御用ひノ通り、少のかた一入〳〵よし〳〵ト存上候、たとうの事、仰の事、御尤〳〵〳〵に存上爲レ參候、

いよ〳〵大樹見臺、亞相末廣にてに御治定遊ばし候樣にと存上爲レ參候、

扨賀茂臨時ノ祭の事に付、仰のよし御さ、此義私十六七歳の時より、臨時ノ祭、再興いたし度物ト兼々申居候事にて候、則當關白にも、毎々此事相談いたし、昨秋比かしきり に色々評義も有レ之事に候、賀茂再興候へば、石清水も同事に候條、兩社とも再興無レ之候ハデハ不都合ノ事に候、石清水三月、賀茂十一月

（以上表面）

如レ此昔より有レ之事に候、兩社ニ相成候バよほど〳〵〳〵〳〵大事に相成、武邊ノ處いかゞやト申候事に候、去ながら是

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

非〳〵、私在位中ニハ再興いたし度、且ハ當政淵公當職中に再興仕度存念に候、所司代も上り候うへ、ゆる〳〵ト談じ候はゞ、外之事トチガイ〳〵、宗廟敬神ノ事候へば、いかやうとも申かた有レ之べき義ト存じ爲レ參候、扨々々々々々其御所にも兼々思しめされ候事、ふしぎ〳〵〳〵是又再興する〳〵のしるしやト忝く〳〵存じ爲レ參候事に候、賀茂臨時祭ノ義ハかな物にては水鏡、公事根源、年中行事などに有レ之通、格別之神勅にて、忝くも光孝天皇ゟ始候事に候、誠に〳〵恐入候事ども候、何とぞ賀茂、石清水とも再興仕度〳〵〳〵御事ども候、くれ〴〵も思召立せんと私所存に候、ふかう仕候事有がたき〳〵御事にはしまし候、

右之事も序ゆへ愚意あらまし申上候事に候、かしく、

御請　　兼仁

第百七十三

光格天皇宸翰
賀茂石清水兩社臨時祭御再興御趣意書

竪一二〇—横一七六　一通（二枚）

賀茂石清水兩社の臨時祭御再興の叡慮を陳べ給ひしものなり、奥に上皇とあるは後櫻町天皇なり。

石清水八幡宮賀茂皇太神宮下上社者、吾邦無比之宗廟、累代朝家之崇敬、異レ于レ他者也、往年有二恒例及臨時祭祀一焉、而中絶之後、於二恒例祭一者、兩社同既被二再興一、于今連綿不レ絶者、於二臨時祭一者、中絶之後、經二歷數百年之星霜一、而無二再興之條一、其恐實不レ少者也、竊聞、櫻町聖皇、既有二叡慮一云々、愚者　宗室之末葉、而不測之天運、辱登二于至尊之寶位一、誠神明社稷之擁護蔭福也、然則偏以レ再二興於神事一爲二先務一、而欲レ奉レ報二神明惠恩萬分之一一之旨趣、勿論之事也、抑大祀新嘗及九月神嘗奉幣幷兩社恒例四八月祭祀等、從二元和一已後、連々被二再興一了、而兩社臨時祭

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

最不レ可二癈絶一之理義、各存二於先規一者乎、愚固不レ肖不レ徳、偏上依二于神明宗廟和光同塵之恩覆一、下以於二執柄幕府文武兩道之輔佐一、在位安穩、既及二于二十有余年一焉、朔旦旬新宮旬等再興、其他諸公事、始二於節會一而至二于巨細之事一、各加二潤飾一之者、不レ可二枚擧一、幸甚々々、何盡二于毫端一哉、而只恐神事之大事、未レ有二一箇再興一焉、神慮如何、非レ可二恐怖一之甚乎、古來神事數多各雖レ不レ可二癈絶一、就レ中於二于兩社臨時祭一者、深有二故事一歟、月次神今食是又爲二重事一、然年々新嘗祭連綿於二遂行一者、聊可レ慰二於神意一乎、相二續于皇太神宮一而者、石清水賀茂最爲レ異レ他、而臨時祭數年中絶、寔背二于敬神之意一、實謬二於發端之旨一、不二再興一而須レ臾可レ安二五内一乎、如レ斯懇篤志願之意旨、執柄者勿論兩傳等深加二思惟一、篤凝二勘辨一、厚談二于諸司代一、以二成就一可レ爲二專要一之事、

上皇御氣色相伺之處、最御同意、速可レ有二其沙汰一、厚深之仰共、有レ之事

百二十代（御花押）

第百七十四

仁孝天皇宸翰御製和歌御懐紙

竪一、四〇―横二、〇三

一通

端裏書によれば文化十二年正月廿四日内裏和歌御會始の時、東宮として認め給ひしものなり。

詠春江霞和歌

皇太子惠仁

難波江のみぎはのこほりとけ初てはるなるなみのかすむのどけさ

第百七十五

仁孝天皇宸翰御製和歌御竪詠草

竪一、一九―横一、七二

一通

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11

ガラス使用

御包紙に
文化十四丁丑五月十八日
代始詠草始立詠草
とあり、御點は光格天皇宸翰なり。

寄松祝

萬代もかぎりはあらじここの葉のさかへ久しき和歌の浦松
生そふる常盤(磐)の松の幾千年おさまれる世に猶さかふらし

第百七十六

仁孝天皇宸翰御製和歌御詠草幷光格天皇宸翰御添削書

竪一、一三―横一、六九
御添削書、竪〇、五九―横〇、七八

二一　通

年月を明かにせず、御添削も光格天皇宸翰なり。

巻頭

新樹

庭の面(木々)はひとつみどりのなつ木立(わか葉さし)しげりて花の色も殘(ぞ)らず(ぬ)
花を見し木々のこずゑの色かへてひとつみどりにしげるこの比

夏木立ノ句ハとかくこのまさる事にて候、よまぬが宜しく候、夫ゆへか様に直し上候事
くわしき義は又々參上のせつ、申上べくト存候事
夏木立冷泉ノりうにはかまはず候へども、當流(トウリユウ)ニテハ不好事(コノマサル)にて候也

二一　葉

第百七十七

仁孝天皇宸翰御製和歌御短册

竪一、二〇―横〇、一八

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

裏書に
文化十四年五月廿七日
當座御會　二枚之内
とあり、御題は宸翰にあらず。

松鶯
春きぬと谷のうぐひす九重のみぎりの松の枝つたふこゑ

雪深
けぬが上に猶いく重とか降つみて野べもみやまも雪ふかきこ
ろ

第百七十八
仁孝天皇宸翰御製三首和歌御懐紙

竪一、三九―横一、〇一

一　通

端裏書によれば弘化二年十一月廿四日の月次和歌御會の御製なり。

詠三首和歌
月前霜
白妙のひかりもここに見ゆるなり月すむよはの霜のまさこち

雪散風
花ならばいとひこそせめうちきらし風のまに〳〵雪ぞちりく
る

寄雲戀
いざさらば雲とやなりてかゝらまし思ふそなたに消はきゆこ
も

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

第百七十九

仁孝天皇宸翰御製和歌御短册

竪一、二〇―横〇、一三

二一葉

歳暮祝の御製は裏書に
弘化二年十二月廿五日去廿二日分
水無瀬宮御法樂
とあり、又河雪の御製は裏書に
弘化二年十二月廿五日
聖廟御法樂
とあるものなり、御題は宸翰にあらず。

歳暮祝
此冬は雪もしば〳〵降つみてげによごしのしるきくれかな

河雪

波はそこにありて行ともしら雪をいく重みなせの河のさむけさ

第百八十

孝明天皇宸翰宸記

竪〇、五四―横一、五二

一冊

表紙に
弘化四年
十一月二十五日自
十二月十二日まで
心覺
とあり。
今其の巻首を拝寫す。

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

二十五日晴
朝常ノ通リ
常殿朝飯御賀美如ㇾ此比、關白不參、黑戸詣、紀州自密柑仁膽酒獻上、
泉山へ大典侍伊與參
入寢丑ノ刻
貳拾六日朝晴、夕後曇
朝常ノ通リ
常殿朝飯御賀美如ㇾ此比、關白不參、黑戸詣

一通

第百八十一
孝明天皇宸翰明治天皇御名字

御包紙に
嘉永五年九月廿九日祐權典侍慶子誕生宮七夜之名字議奏へみせし
の也
ことあり
祐佐知

一通

第百八十二
孝明天皇宸翰明治天皇御名字　竪一、〇七—横一、五四

嘉永五年九月廿二日明治天皇御誕生あらせられ、次いで同廿八日立親王の御儀ありし時の宸翰なり、御包紙に
右ハ議奏へ出ス也
ことあり。
睦仁武豆比登

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

第百八十三

孝明天皇宸翰
皇居炎上御避難御道中御製和歌御詠草

竪〇、六四—横一三、五〇　一巻

安政元年(嘉永七年)四月皇居炎上の節、御避難御道中の御製和歌を關白鷹司政通に示し給ひしものなり、第一御包紙に

入賢覽候　此花

第二御包紙に

甚あやしき物、理不盡の事計に候へ共、四月八日ゟ口ずさみ候を、漸清書候間、爲御笑艸御目に掛申候、御所存之程承度候事

第三御包紙に

關白へ遣し候の也、嘉永七年四月六日、内裏炎上之節、立退後ゟの紀行の歌也

とあり、之に對して鷹司政通は

紀行の御書かへし奉るに　まさ通上

とり〴〵にながめそへたることの葉はまこと情のめぐこそ(み脱カ)

しれ

と奉答す、乃ち天皇これが御包紙に

嘉永七年四月六日炎上之時、鴨社へ立のき、其上聖護院宮へ移徙之節、即詠見遣太閤返歌

と書して保存し給ひしものなり、此花(シクワ)とは天皇の御雅號なり。

今其の卷尾を拜寫し、全文を擧ぐ。

嘉永七年卯月六日午の時、おもはずも築地内より火移り、内裏も火及ゆえ、不得止事、急のがれ出ルとて

立いづる行衛いづくとしらねどもたゞ古さとをあとに見すてゝ

其より、余程輿をあゆませ、今はあぶなげなしと聞ても、劔璽も輿の中無之、内侍所もいかにともしらざれば、あんじわづらひつゝ

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

身ひとつをのがれいでゝもこの國の三のたからの行衛いかにと

其後、行々、けふぞ始て、民の家居をみて

立ならぶ民の家居をいまぞみてまづしき物をあはれとぞおもふ

賀茂河の橋を渡るとて

賀茂河の清きながれをいまぞみて心うれしく渡る板ばし

鴨の社一之鳥居邊にて、橋本中將馳付、劍璽持參、入輿中、余りの嬉しさに

あら嬉し國のたからのつゝがなくともに乘つる今のよろこび

其ゟ程なく、鴨宮居に輿を留て、少し心を安じつゝ

頼もしな鴨の宮ゐにこしをとめて今ぞ始て心やすくも

右府內府兩公世話にて、こりあへず、神の土器にて水を呑こて

おもはずも神のうつはにのむ水にをごろく胸もやすらけくして

こゝとは不二分明乍、堂上女房各無恙よし聞つゝ

誰もかもつゝがなきこそうれしけれよろずの品にかへむ命は

程なく輿の傍え、關白の被來まゝ、余りの嬉しさに

今こそはこゝろやすけれ杖はしら頼める人の來ますを見れば

其後、追々諸臣來つゝ、見舞くれる言葉に

諸臣の來つゝ尋ぬるこゝの葉に少し心をたしかにぞおもふ

賢所も拜殿に御座すと聞て、見上つゝ

かしこしなかしこごころのみあらかもこゝにましますこゝろたしかに

常々は遙拜なれごも、けふおもはずも、此御社に至ぬれば、いつよりも心たのもしくおもひつゝ

國民のやすけきことをけふこゝにむかいて祈る神の御前に

異船の治ることをさらにいまふかくも頼む鴨の御社

是より聖護院宮へ移替とて未時計、輿に乘出る折から

またこゝにまふづる程もしらざれば名殘おしくも思ひつゝゐれ

其より乘出、此度は始とは少しゆるくあゆませば

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

こゝろをも少し安けくおもひつゝ見わたす道のめづらしきかな

諸司代脇坂淡路守守護にいで、路の傍に、おるを見て

武士のみちのほこりをまもるれば實たのもしくおもひこそすれ

ゆく〳〵路の傍に菜種のいとうるはしく咲るをみて

春過て卯月のそらにさき殘る菜たねの花の色もゐならず

其よりまた少しあゆめば、賤が屋とみえて、せまき庵の内に山吹の咲亂たるをみて

口なしの色ながらにも山ぶきの咲るはけふの道の詠かな

此の内のぬしはたれともしらねごも立よりてまし山吹のはな

聞及關白殿の別莊常盤井の屋敷とは萬里小路中納言申せしを聞て

名にもめで猶末ながくさかふらん千世の緑の常盤井の里

ゆかしくも立よりてみむ常盤井の里の臺をけふぞはじめて

五こく耕作はみあたらねど、野菜物の生きたるをみて、是も民のなりはいに不レ有二相違一とおもゐて

いつとなく心づくしに作なす民のなりはゐおもひこそやれ

其より、程なく聖護院宮室へ着ぬれば、先々心やすくて、其日は何かと暮し、明ればあそこゝと庭の面を詠て、藤山吹のいとおもしろく咲みだれたるも、ゐならずおもひつゝ

春過て夏來にけれと咲てみす藤山ぶきの花もゐならず

野邊を見渡して

夏ながら猶のごかにも見渡せば野邊はみごりの色のまに〳〵

日々あなたこなたより貴物有、志をおもひて

かく計おもひをつくす人ごゝろなごかあだにはをもはざらめや

菓子さかななど日々是も同樣に、あなたこなたよりもらひぬれば、同じ火にあひし人々の事をおもひ遣つゝ

火におよぶほごは我らにかぎらねば同じ友にも惠もらさむ

我よりも民のまづしきごもがらに惠ありたくおもふのみかは

十四日、八つ時餘りの頃、庭の後の馬場にて、附の武士長谷河肥

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

前守乗馬を茶屋よりみて

武士のこまのあゆみをめづらしくこゝに宿りて詠こそすれ

緑そふ木のしたかげを乗わたる駒のあゆみもゆたか成けり

其後、此茶屋にてめづらしく間物食つゝ

わか緑色そふかげの此庵にけふもてはやしめぐる盃

十四日、けふは此宿りを立いづるところ、雨いと降つゞきしゆへ、まづけふは延引にぞ成にける

立いづる名殘をもひてふる雨に又けふひと日足をとゞめて

十五日、こゝろよき晴なれば、けふぞ宿りをかへむと、朝とくよりこしらへつゝ

しばしながら馴し宿りを立いづる名殘おしくもあとをみすてゝ

又こゝに来る事もあらじ、名殘おしくおもひつゝ、更に端近く出て、庭の面をみて

我こゝに宿りしことをわするなよ藤山ぶきも心ありせば

時刻うつれば、輿に乗つゝ出にけり、聞及つる熊野の社を通りて

つたい聞熊野のやしろふしおがみ猶行末を頼こそすれ

其より路々餘程通り、賀茂の河の當りを通りしに、前の日通りし時とは降つゞく雨に水ましぬればさきの日の詠しおりにたちかへて河瀬の水の音まさりつゝ

其より内裏ちかく路々を通りつゝ、辻ごしに焼失の跡とおぼしく、板圍などのあとを見つゝ

あはれさはいはん方なし住なるゝ我古郷のあとゝおもへば

其より桂家に入つゝ、此上の安心に

此殿にやどりさだめていまよりは猶するがの榮へをぞまつ

此花

第百八十四

孝明天皇宸翰御製和歌御懐紙

竪一、三九—横二、〇一

一通

張紙によれば安政元年(嘉永七年)七月十一日神宮御法樂の御製なり。

詠秋名所海和歌

伊勢しまやいそべの月に見わたせば海ばらきよくかよふ秋かぜ

一通(七枚)

第百八十五

孝明天皇宸翰近衞家糸櫻御製和歌御續懐紙 竪一、二五—横一、六五

御附札に

安政二年近衞家花見ニ付、後日ニ遣

詠巻物寫

此花

ことありて、近衛忠熙に賜ひし御製和歌の御扣なり、御苑内朔平門外なる舊近衛邸には今猶糸櫻の老木數株あり。今其の首尾を拜寫し、全文を擧ぐ。

安政二年きさらぎ仲の四日あまり、かねてこく約束いたしつる近衛殿へ行むかひ、名にしおふ糸櫻を見て

昔より名には聞ごもけふみればむべめかれせぬいこざくらかな

みれごあかぬ風をすがたのいこざくら花の色香は長々し日も

をのづからこゝろも花に匂ふまでいこにさくらの咲つゞくころ

青柳の千すぢの糸に香をこめてさくかこおもふ花のいくもこ

いこ櫻いこながき日もくり返し風のまに〳〵なびく花ぶさ

午の時頃より、時々雨降ければ

是もまたあかぬながめこなりてけりさくらが糸にかゝる春さ

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

め

糸櫻いとくりかけてふる雨にはなの色香もそふこゝちせり

又々雨は晴て、日影も花の上にてりそへば

村さめの晴ゆく跡に春の日やはなのひかりをみがき添つゝ

はる雨のはれ行あとにいとざくらかずそふ花や露のしら玉

黄鳥小蝶など花にたはむるゝも、又興ありて

花の香をめづるこゝろかいとざくらいとのごかにも遊ぶ小蝶

は

糸ざくら枝づたひするうぐひすのをのが羽色は若葉とも見ゆ

咲つゞく花の色香をしたひてやいとにみだるゝはるの鶯

夕方にも成ぬれば、酒のたぐひとりかわし、けふはめづらしく

男方を召よせ、花の宴催すこと、右のおほい大臣より數々儲

物ありければ、喜のあまり

花のことあふてふさへも嬉しきをこゝろつくしの人の情は

高杯に菓子肴物など盛あり、その取合に松藤の作物ありけるを見て

けふこゝに千世を重ねてたつ松にちぎりてめぐれ春の盃

松ふぢのたてる姿を種としてこと葉の花も咲さかふ蘭

夕景にもなりて、猶更空もとくはれ、日影もうつろひし景色、又

たぐひなければ

花のうへに夕日の影のうつろひてさらに色ます庭の面かな

日の影はおさまる比のはなの上をさらにてらして出る月かな

色みえぬたそがれ時の花のうへにほのめきわたる今日の月影

追々にぎ〳〵しく、盃もへだてなくめぐりて

やわらぐる人のこゝろも花ゆへと猶よをかけてめぐる盃

とく暮て、月も光そひ、さやかにひをてらす景色、又たぐひなく

おぼえ

けたれけむ春の夜すがらかすまぬは月もさくらの花の色にや

誠に雪月花ひとつの景色のおもしろさに

雪とのみ梢にはなのさく色もみがきそへたる月の影かな

それより、庭へ下立、床机の本に打つゞひて

この本に打つゞひつゝながめても心のはなの色は匂はず

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

月のかげ花のひかりもいやましてよ
面白やさすさかづきに影みえてつき
何ごともおもひ忘れて月のかげはな
雪かごもみゆるばかりに咲みちて庭はいろそふ花の上の月
又もこの所へかへりつゝ、盃のめぐる余り、人々手折し花を冠
にかざす子にもみぎのおうい臣のかざして
さかづきのめぐれるまゝに庭ざくら手折しはなをわれも挿し
つ
袂にも匂ひこゞめんたおりつゝ花をかざしてうたふ宮人
何かこ長き酒宴になりぬるほごに
かへるべき家ぢわすれていつ迄もはなにめぐらす春のさかづ
き
程なく警固も揃ぬれば、名殘おしくも暇申して歸るさに
いつまでも何わするべきこの殿の花さくら木の今日のながめ
は
名殘あれやあかぬ心を木もこのはなにこゞめてかへるよの空

第百八十六

孝明天皇宸翰近衛家糸櫻御製和歌御懐紙

安政二乙卯年二月十四日

感花宴面白慶悦無限、余詠之

統仁(御印)

竪一、一〇—横一、四二　一通

前掲の御製和歌を近衛忠熙に賜ひし時の御書損にして、金砂子泥引の料紙に特に金泥もて糸櫻を描けり。

さくかこおもふ花のいくもこ
いこざくらいこ長き日もくり返し風のまに〳〵なびく花房
午の時ごろより、こきゞ〳〵あめふりければ
是もまたあかぬながめこなりてけりさくらがいこにかゝる春

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

さめ
いとざくら糸よりかけてふる雨にはなの色香もそふこゝちせり
また〳〵雨は晴て、日かげもはなの上に照そへば
村さめの晴行あとに春の日やはなの光をみがき添つゝ

第百八十七
孝明天皇宸翰御製和歌御短册

竪一、二〇―横〇、一八　二一葉

安政四年十月八日の御製なり。

里欵冬
妹が住里のかきねのやまぶきはなびくすがたのなつかしきかも

寄弓祝言
弓とりて引もひかぬも武士はたさまる世々の爲ならぬかや

第百八十八
孝明天皇宸翰御消息

竪一、〇九―横一、五六　一通（三枚）

安政五年二月十六日近衛忠熙に賜ひしものにして、御包紙に
左大臣殿　此花
机下江
とあり。

不順之時候、專一御用心ト存候事、早々御快腹（復）拝貝吳々モ願入候事、實々天下之一大事、深悲痛仕候事、乍毎大ニ亂書、高免御推覽願入候事、

此花謹言

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

快晴乍、兎角難」去春寒ニ候處、倍尊公御安泰令」賀候、御所勞追々御
快方ニ被」爲」在候哉承知致度候精々御大事ニ御用心御壯健之段
祈々存候事、余リ〳〵御無沙汰申候間、御面働之段者恐縮乍、一筆
令二啓試一候、
且亦過日者、以二青門一愚存申試候處、御承知之上、段々承忝存候、其後
モ段々ト日々議奏抔共談候て、何共心配之至ニ候、太閤右府之處
何共見込違之樣子、内々承、其上武傳モちと堀田申條ニかたぶき
掛候模樣聞候半デモ無」之、誠ニ〳〵心配仕候、此節デハ關白ハ大
分きばり被」居候由、先々其ニ而賴ニ有」之候、何卒關白之心得違無」
之樣と其已存候事、尤きばる可職分ガ、心得違有」之、虛端な返答振
ニ成候而ハ實ニ一大事ニ候、諸大名以下人々者叡慮次第ト申、皆
ごうか私ヲ當ニ目ざし候樣子ニモ承候得共、私モ兼而御承知之
通ノ愚昧短才之質、中々量件ハ少シモ無」之候、然又過日御目ニ掛
候書取之樣成物乍、万ニ一ハ麁忽乍モ所存出候義モ無」之ニモ無」
之乍、其サエ諸方江不」通、中道ニ而霧隔候而ハ、誠ニ〳〵歎ケ敷存
候、實々今度之義者、誠ニ〳〵一重大事、他事ト替少シモ、見込はづ

れ候而者、後世ニモ天下之禍と實ニ心配仕候、其上關白江不二申聞一、
太閤邊計ニ而濟候事モ、ごうか内々乍、武傳方ニ有」之由も承候半
而も無」之、左候ば私モ不」知、又所存不」立、可笑な物にて事治定ニ成
候ば、誠ニ心配之至ニ候、世上之風評モ、此節太閤ハ甚惡敷樣子、扱
々氣毒〳〵之事ニ候、關白ハきつう善評判之樣子、左程ニモ無」之
候半哉、然々右一件ハ、余程きばいられ候由ニ候、右ニ付私存候ハ
何分ニも人心折合、人和肝要ニ存候、何卒過日モ以二青門一申入候通、
御親族之大名方江、内々ニ而も、右存意御洩有」之候而、各承知致居
候ば、万一今度可笑な返答振ニ成候共、一等之心意はなれ間敷哉、
つまり私ガ宜者ニ成度ニ而ハ實々決メ無」之、何分ニモ日本國之
爲故、私一人之爲ニ而ハ決メ無」之候、其段御賢察希入候、何分ニも
此度之返答之處、只今之模樣ニ而ハ私始、勅答方々之御所存通ニ
ハ、ちと成兼候半やト心痛仕候、仍鳥渡御尋申試候は、御親族之武
邊之見込沙汰ハ、以何樣成義ニ候や、實ニ只今之處ニ而堀田申通、
戰爭ハ致難や、又は隨分好候模樣ニ候哉、鳥渡御尋申入候事、
昨日モ武傳ゟ被露候而

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

亞米利幹約條和文下案二冊

右は約條ごうか治定之樣ニ而、中々私所存相談ニ而は無レ之樣子ニ候、此中にハ大分之事モ有レ之候事、

此余實ニ六ケ敷世ニ成、扨々困リ〳〵入候、鳥渡此段申入置候、又々御所存モ被レ爲レ有候ハヾ、無二御隔意一承度、左候ハヾ又々勘考之種ニモ成忝存候事、何分ニモ御快氣次第得二拜顏一度候事、

甚々申兼候義、且御心慮之程茂以何カ難レ計候得共、押而申入候ハ、他事ハ扨置、此一件は、必々鷹司一家之沙汰ニハ御なづみ無レ之樣と存候、何卒願バ尊公モ私之味方ニ御成被レ遊被レ下候ハヾ、厚恩難二申盡一畏々入候事、吳々モ御じよさいハ不レ被レ爲レ有乍、御きばり御配慮希入候事、色々ムザト不二相替一御心易立、不レ顧二前後一申入、死罪難レ逃候事、

誠ニ過日ハ兼而之薩州ゟ之簞笥被二送下一、先以忝存候、即開見候處、過分之御品、大ニびつくり、扨々御立派之仕立、誠ニ〳〵日々用候ニハ宜過候事ト存候、然々珍敷仕立、万端實ニ大ニ喜悦無レ限候、宜御禮申入候、又々御序之節、右喜悦之段御傳達希入候事、何モ荒々、

吳々モ色々ムザト申入、恐縮不レ少、高免願入候事、御所勞之折柄、御面働恐入候事、尤々御快節御勝手ニ御覽願入候、御返事ハ尤亞相ニ而モ御代筆ニ而賜候樣、希入候事、何モ荒々

二月十六日午半刻認

左大臣殿

御机下江

此花

第百八十九

孝明天皇宸翰御消息

竪一、〇九—横一、五〇

一通（二枚）

安政五年四月五日近衛忠熙に賜ひしものにして、御包紙に

左大臣殿　此花

御机下江

とあり。

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11

ガラス使用

不揃之時候、御用心可レ被レ成存候、亂書高免願入候事、猶又御入
來之砌、万々御咄合申候事、何モ荒々、
雨天朦々敷候處、倍尊公御安泰令レ賀候、
今朝冨小路參上、一封捧、委細達二于御聽一候由、御返翰幷御一封被レ送
下一忝存候、誠ニ無左ト致候事申入候處、御承引之由、深忝存候、仍別
紙入二于尊覽一御尋試候、宜御勘考願入候事、且昨日之一封之内、女房
月次題差上候樣認置、取落ニ相成、甚不都合宜御斷申入候、追而乍
進上候事、
且序乍申入候、武傳跡役之事、去一日關白入來之節、申置候間、申渡
ニ成候積之處、未ニ而今日入來之節、大夫尋ニ而早々内慮可二申遣一
答置候、今日申渡シニ相成候覺悟ニ候、仍鳥渡申入置候事、且過日
極密被レ爲レ見下一候有馬詠吟、得と勘候處、大分油斷不二出來一之歌意ト
被レ察候、昨日靑門モ左樣被二申居一候、然々於レ私ハ以何樣之事有候共、
強不レ恐、只々神州之瑕瑾不レ成、永代安全、萬民娯樂計願候事、一身以
何樣成共、強而不レ頓着之積リニ候事、鳥渡此段御一笑迄、御咄申入
置候事、毎々捧二一封一、御面働之段、御斷申置候事、猶又可レ承事候ハヾ
無二御遠慮一被二仰聞一願置候事、何モ荒々、

初夏五日

左大臣殿

御机下江

此花

一通

第百九十

孝明天皇宸翰御消息

竪一〇九―横一五〇

安政五年四月十一日近衛忠熙に賜ひしものにして、御包紙に
左大臣殿江　此花
とあり。

不順之時候、御用心可レ被レ成存候事、大ニ亂書、高免願入候事、何モ

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

荒々、

晴乍兎角不揃之時氣ニ候處、倍尊公御安泰令ㇾ賀候、誠爾過日御入來ニ而萬々御咄申深忝存候、又々御面働之義乍、鳥渡御尋試候、今度異國退散祈禱、伊勢公卿勅使之事、關東江内慮申遣置候、未否哉返答ハ不ニ申來一候得共、其内ニハ可ニ申來一ト存候、左候得者追々次第モ可ㇾ有ㇾ之事ニ候、就ㇾ右、宣命私執筆之義ニ候、右辭別宣命之處、私存念通認候由ニ候、先例關白草作進之由ニ候、然今度之處、以何ガ成候哉、不分明ニ候、私存候ハ有ㇾ心輩者又加樣々々之事加入可ㇾ然存候人モ可ㇾ有ㇾ之候間、三條所存以何ガ有ㇾ之候哉、又々右文狀之處所存有ㇾ之候得者、何卒無ニ遠慮一可ニ申入一、左候ハヾ又々私之助力ニモ成忝存候、此節關白ハ入來無ㇾ之事故、一向此節ニ而モ尊公御同伴御入來ニ而、一夜打解御相談可ㇾ申候哉、又若右之次第、從ニ尊公一三條家へ極密被ニ仰渡一、一封ニ而も被ㇾ送候哉、兩樣之内、以何樣成共宜樣ニ而宜敷候間、何卒御勘考希入候事、又別ニ所存モ無ㇾ之事ニ候ハヾ宜乍、又々所存可ㇾ有ㇾ之共存候間、一應申入試候事、何モ荒々、追申入候、

過日御願申入候刀ハ、總而侍ノ大刀等通リノ作方長き方宜候事、

四月十一日　午前刻　　左大臣殿　　此花　　御机下江　　一通

第百九十一

孝明天皇宸翰神宮宸筆宣命

竪一、三六―横三、四四

安政五年六月十七日神宮に告げ奉り給ひしものなり。

掛畏伎伊勢乃度會乃五十鈴乃河上乃下都磐根仁、大宮柱廣敷立天高天原仁千木高知豆、稱辭定奉留、天照坐皇太神乃廣前仁、恐美恐美毛申天久、統仁以ニ薄德一天、猥仁守ニ洪基止茂性猶童蒙奈、施ㇾ德古止未ㇾ洽ニ四海一豆、天日嗣乎受傳邊、顧ニ古今一氐獨

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

慙懼留止毛偏爾厚御恤美廣御助爾可レ在利奈、爰去奴留嘉永年以往多、蠻夷屢來禮止毛、殊墨夷波爲二魁首一天、深我國與和親乎所レ請呂、後年併呑之兆志、又邪教之傳染茂亦可レ恐志、若逆レ要倍者可レ曁二戰爭一之由乎白寸、實爾安危乃間多、難レ決久思煩止古呂、於二東武一豆及二應接一比、方今可二差拒一乃慮毛奈久、時勢乃變革乎以氐貿易通交乎許容世牟止欲寸、是輙知天下國家之汚辱、禍害不レ遠止晝毛無久夜度毛無久、寤天毛憂邊寐天毛憂布、若兵船來倍久在波、

皇太神早久照察乎垂給比、殊神德乃擁護乎以天、蒙古之舊蹤乃如久、施二神風一給、賊船令二漂沒一女、鎭護乃誓乎不レ愆豆志、天變地妖之怪可レ在奈利止毛、消除給天、泰平延長爾、公武和熟志、絶レ疑知、去讒利、不正之流言不レ起須、臣庶黎民仁至末、挾二姦計一美、不レ報二國恩一者波、可レ令レ蒙二神罰一利、希波冥助乎仰岐、靈驗乎可レ憑仁依天、幣使乎發遣世志、吉日良辰乎擇定氐正二位行權大納言藤原朝臣公純乎差使氐、禮代乃幣帛乎持齋利令二捧持一氐、御馬乎牽副氐奉出給布、

皇太神此狀乎平久安久聞食天、國體乎不レ誤豆志、禍亂乎除支給比、四海靜謐、萬民娛樂、永戎狄之憂奈久、五穀豐熟爾志、寶無(祚カ)レ動久、常磐堅磐仁、夜守日守仁護幸給倍止、恐美恐毛申天申須

安政五年六月十七日

第百九十二

孝明天皇宸翰御製和歌御懷紙

竪、一四〇―横二〇四　一通

同封せられたる御歌題短册に

兼思十三夜月來十一日神宮法樂

とあり、列聖全集本によれば、安政六年八月の御製なり、又兼の字は先々帝の御諱なれば闕畫し給へるなり。

詠兼思十三夜月和歌

日本のくもらぬかげは望のみかあきなが月もさこそしらるれ

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

第百九十三

孝明天皇宸翰此花詠標題

竪〇、六一―横〇、八四　一冊

文久二年三年の御製和歌御題及び月日の御留書にして、元治元年三月國事多端の折柄、政務の御餘暇にものし給ひしものなり、天淵とは天皇の御雅號なり。

今其の首尾を拜寫す。

此花詠標題　（御印）

文久二年　二廿四日

立春　正五試筆二廿二水無瀬宮法樂

初春　正十五石清水社法樂

初春山　正十八會始

風光日々新

朝

子日　二廿五聖廟法樂

子日松　七廿七春日社法樂

霞中瀧　正廿三小御所當座始　（以上卷首）

文久二三年

此花詠集　（御印）

元治元年三月

政務閑暇認之　（御印）　（以上卷末）

第百九十四

孝明天皇宸翰宇佐宮御奉納五十首御製和歌御續懷紙

竪一、〇八―横一六、九一　一卷

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

料紙は金泥の龍形文様ある萠黄、朽葉、蘇芳等の色紙を用ひ給ひ、
柳筥に収められたり、別に御備忘一通あり、それには
此壹箱、元治元年五月廿一日、宇佐宮奉詠五十首巻物、
右扣ニ殘置也、形其儘掛置、料紙色形同上
とあり。
今御製の部分の末尾を拝寫し、全文を擧ぐ。

詠五十首和歌

春十首

立春

天がした長閑なれごも立そむるはるの光は四方にへだてじ

海霞

浪のうへの遠くかすみて道ひろきはるの色ある和田の原かな

若菜

春の色は野澤にみちぬ諸人のいざやわかなをつみもはやさむ

洛雪

まださかぬ花をいそぐや花の名のみやこにきゐるうぐひすの
聲

梅盛

わかざりし雪は殘らず梅がえはいろかばかりのいま盛なる

春雨

長き日に降し此世の爲なるかくさ木もめぐむ春雨のそら

朝花

朝日かげさしそふ枝の櫻ばなひごきは色のまさりてぞみゆ

遲日

萬こと怠たらずせん春の日のめぐり遲きをあだにくらさで

欵冬

春の日數いざこえぬべき垣ねにもいろはふりせぬやま吹のは
な

惜花

花は根に鳥は古すにかへるなりなごりぞ惜きはるの暮かな

夏七首

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

更衣
あしき事はかくあら玉れ夏きぬと花にそめしもかふる衣手
郭公
いつまでか心づくしのほとゝぎす待さで早く名のれこそ思ふ
砌橘
五月雨の降しめるこもしめらずもみぎりにふかく匂ふ立ばな
梅雨
長くこもかぎりは有ぬ梅の雨さりこて晴よ異國のうさ
夏月
自然蚊の聲遠し夏のよやたゞ涼しさの月に明さん
納涼
木々の風落て流るゝ水の音もへだてず涼し夏の夕ぐれ
夏祓
身につもるうきをば今日に夏はらへいざや涼しきよを渡らなむ
秋十首

籬菊
憂を隔てよき音づれを荻のかぜ同じまがきに分てきかせよ
萩露
萩の戸の花にいく秋かけぬらんかみのめぐみのふかき白つゆ
徑薄
ほそくこも直成路にまねけかしあき風帶る花すゝきぞも
叢虫
草村のくさ〴〵物をおもふこはむしさへ知で音にや鳴らむ
初鴈
嶺あまた越來るこゑも初鴈はしづけき秋の洛したふか
橋月
ながむれば流るゝ水に影うつしくまなく渡る月の板ばし
擣衣
音にたてゝ百度千たびうてやゝ〳〵よ寒を業の賤がさごろも
葛風
いこふ物は風にしられてこに角に葛のうら葉の吹もかへさる

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

紅葉
時を知あきの色こて野も山もつゆこ霜こに染る紅葉ば
暮秋
長月のながきもいつか置露のしもこぞならん秋のくれ方
冬七首
時雨
よきかぜにつれて時雨る雨ならば寒けきこてもいこはざりけれ
落葉
時へぬる色にし有かな木々の葉はかぜ吹ずこもちりもこそすれ
千鳥
難波がた芦の霜がれさはく〳〵こゆふなみ千鳥群て立なり
深雪
風さへもしづか成ける冬の庭ひかりくもらず雪のつもれば
鷹狩

願はくばこゝろの儘の得物せんかく思ひこみかりす野山に
神樂
ひたすらにめぐみのほごを肩にかけおもひひこつのから神の
舞
除夜
わざはひはあしの矢をもてなやらふもはる待業の今宵なりけり
戀十首
戀鏡
かばかりに思ひをうつす十寸鏡むかふがごくいつか逢らむ
戀枕
幾度か枕のちりをはらへごも戀のこゝろのさりやらでうし
戀衣
袖かろくかぶる衣も重きかななみだにぬれて戀すてふ身は
戀硯
おもひ餘り硯の海のひる迄も書こかひなき中のたま章

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

戀琴
ここにかゝるその糸筋のむすぼれずおもひこけたる音をや立
なん

戀笛
笛竹のよをかさねけりいつしかはあな嬉しこも吹ならしてむ

戀弓
強き弓に心ぞつくす其人をおもふ戀ぢに曳もよせんと

戀扇
扇てふ名にし習ふと知ならばちよろづまでも人をまねかん

戀燈
こもし火は消なんとすれいつ迄か閨にこがれて殘るうき身ぞ

戀舟
おもふ方に早こぎ行め吹かぜのたよりもしらぬ戀のうきぶね

雜六首

山家
淋しさはこまれかくまれ山里にすみつる身こそこゝろやすか

れ

關屋
歎かはし治まれる世の關屋にもまた心つくる人の有こは

浦鶴
芦たづのあしきはしらず住よしのうらわのまつに千世よばふ

聲
述懷
天がした人こゝろあはせよろづの事におもふごちなれ

神祇
奉るそのみてぐらを受ましてくにたみやすく猶守りてよ

祝言
松のはの數ならずこも祈るにもさかへをこはの秋つすの國

元治元年五月廿一日

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

第百九十五

孝明天皇宸翰御製三首和歌御懐紙

竪二、四〇—横二、〇三　一通

附札によれば慶應二年十一月廿八日の月次和歌御會の時の御製なり。

詠三首和歌

雲間寒月

雪になるかみぞれに成こみし雲のひまほのめかしさゆる月かな

垣根雪

枯し草のふたゝびはなのさくこみればけり雪のつもれる垣根なり

契行末戀

假初のちぎりこてしもゆくすゑをたのむは戀のならひなりつ

れ

第百九十六

孝明天皇宸翰坊中日次案

竪〇、七二—横〇、五三　一冊

東宮に在せし時の宸記の一部なり、安政元年(嘉永七年)皇居炎上の節、燒殘りし由御後筆により明かなり、巻首の「宮内省圖書印」の朱印につきては「第十七」の解説に述べしが如し。

今其の首尾を拝寫す。

後筆

右日次案者、此花春宮中心覺也、甚大略事々計記、他事日々巨細之事不注、且亦落字誤字等可有之、猶亦心付從直書入可有之事、此花

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

十一才立坊ゟ書始有レ之之處、右前後日次、去嘉永七年四月六日之
炎上ニ燒失、仍不ニ相分一、右二ケ年者、不レ計燒殘、仍右書入後相加事、
（以上巻首）

次孟予酌
右終
弘化二年　統仁（御印）
書入直
安政四年ヨリ此花（御印）

（以上巻末）

第百九十七
明治天皇宸翰御製和歌御懐紙　竪一、三九―横二、〇三

一通

明治二年正月廿四日歌御會始の時のものなり。

詠春風來海上和歌
ちよ萬かはらぬ春のしるしとて海べをつたふ風ぞのどけき

一通

第百九十八
明治天皇宸翰御製和歌御懐紙　竪一、五一―横二、一七

明治二十三年一月十八日歌御會始の時のものなり。

詠寄國祝歌
あらたまのとしをむかへてよろづたみひとつこゝろにくにいはふらし

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

第百九十九

明治天皇宸翰御製和歌御懐紙

竪一、五二―横二、一八　一通

明治三十九年二月七日歌御會始の時のものなり。

詠新年河歌

あらたまのこしたちかへる河波にしめかざりせしふねもみえけり

第二百

明治天皇宸翰御製和歌御懐紙

竪一、五一―横二、一六　一通

明治四十五年一月廿三日歌御會始の時のものなり

詠松上鶴歌

あさづくひとよさかのぼる山松の木末をしめてたつぞなくなる

第二百一

明治天皇宸翰御幼時御製和歌御詠草

竪一、〇九―横一、五三　一通

御十歳前後の御製にして、御添削は孝明天皇宸翰なり

(二空)あけぼのにかりかへり(ろ)てぞ(一)春の日のこる(ぞ)をきゝてぞ(こゆる)のどかに(三)なりけり

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

第二百二

明治天皇宸翰御幼時御清書

竪二、五一―横一、〇九　一一通

有栖川宮幟仁親王の朱書にて御加筆ありしものなり。
今九通の内二通を拝寫す。

有
無

第二百三

明治天皇宸翰御製和歌御色紙

竪〇、七一―横〇、六一　一一葉

年月を明かにせず、西洋紙を用ひ給へり。

山初冬
あしびきの山のこのはの朝風にちれるも冬のしるしなりけり

第二百四

明治天皇宸翰御製和歌御短册

電信機、竪一、二一―横〇、二一〇
閣龍、竪一、二一―横〇、二一一　一一葉

何れも年月を明かにせず。

電信機
百千里道をへだてゝ言の葉をとりかはしぬるてれからふかな

閣龍

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

うなばらのふかきおもひの年をへて國ありけりこしりさだめけむ

第二百五

大正天皇宸翰御製和歌御懐紙

竪一、五〇―横二、一五　一通

大正三年一月十九日歌御會始の時のものなり。

詠社頭杉歌

さくすゞのいすゞのみやにしげりあひてたてる神すぎいくよへぬらむ

第二百六

大正天皇宸翰御製詩

竪一、二五―横二、二三　一通

寒香亭は赤阪御所内梅林中にある亭の名なり、此の御製は大正七年十二月十六日伯爵正親町實正に賜ひしものにして、同十四年十二月伯爵正親町實和の獻上に係る。

寒香亭

林園春淺雪餘天、剪々風來鳥語傳、好是寒香亭子上、梅花相對似二神仙一、

（御印）

第二百七

大正天皇宸翰御製和歌御短册

竪一、二〇―横〇、二〇　二一葉

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

二葉とも東宮御時代のものと拝察すれども年次を明かにせず。

大みいつふりおこさむと劒太刀をはりの國にゆき通ひけむ

嘉仁

ちる花の雪ふみわけて歸るにも駒のあがきにいざまかせてむ

嘉仁

第二百八

大正天皇宸翰御一行物

竪五、五〇―横二、〇〇　一通

明治四十三年頃なほ東宮に在せし時のものと拝察す。

春風徧三宇宙一

嘉仁（御印）

第二百九

英照皇太后御筆御和歌御短册

竪一、二〇―横〇、一八　一一葉

二葉とも安政四年十月八日の御歌にして、裏面に御署名あり、御題は孝明天皇宸翰なり。

早春風

ひさかたの空もうらゝに打かすみやはらぐ春の松かぜのこゑ

朝郭公

あさ戸明てむかふ木だちの茂みよりおもはずも聞やまほとゝ

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

ぎす

第二百十

英照皇太后御筆百首御組題

竪一・三〇―横一・七五　一通（二枚）

御包紙に

文久三年

従二九月二日一至二十二月十三日一

第三度

こあり、孝明天皇の日々の御製御短册を御整理の時、御作製あり しものにして、所々御改削の跡の見ゆるは孝明天皇の宸翰なり。

今首の一枚を拜寫す。

百首

霞中子日　浦鶯
梅有遲速　山家柳
棧春雨　渡歸鴈
向花戀友　落花未遍
庭欵冬　岡藤
卯花誰家　夢中聞郭公
盧橘薰簾　江五月雨
曉照射　遠村蚊遣火
泉聲來枕　六月秡
客衣露重　寢覺荻風
蘭追日短　田家橧
鹿聞兩方　曉霧滿舟
月不擇處　每秋月同
橋邊菊　深山尋紅葉
霜隱落葉　池寒蘆
霰亂枕上　雪滿高低
水漸凍
遠島雪

貴賤迎春
浦殘雪（春雪散風）
旅泊春月
與女見花
躑躅紅
林早夏
刈菖蒲
杜夏草
嶋螢
雨中七夕
水邊女郎花
近初鴈
對月調吟
野擣衣
舟中時雨
海路千鳥
行客摘若菜
樵路早蕨
聞法待花（對山）
花浮澗水
閏三月盡
市郭公
隣家水鷄
綠池紅蓮
立秋天
萩滿野徑
聞虫
家々待月
月前遠望
孀閨冬來（十月紅葉）

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

暮鷹狩　遠炭竈　閑居爐火　神樂及曉
佛名　老後歲暮
梅香春近

第二百十一

英照皇太后御筆御和歌御懷紙

竪一、二五―横一、六三　一通

附札によれば慶應元年(元治二年)正月廿四日和歌御會始の時のものなり。

うぐひすもこゑこくひらけのどかなるみなみの園の梅のいろ
香に

第二百十二

英照皇太后御筆御和歌御懷紙

竪一、二五―横一、六二　一通

附札によれば慶應二年九月九日重陽和歌御會の時のものにして、黃紙を用ひ給へり。

つきしなききみが言葉の種なればむべひさしくもにほふしら
菊

第二百十三

英照皇太后御筆御和歌御短册

竪一、二〇―横〇、一八　一葉

月日なご明かならざれごも大政復古を慶賀し給ひし御歌なり、

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

御題は冷泉爲理の筆なるべし、裏面に御署名あり、特に拜寫せり。

慶賀
まつりごと舊きにかへるかしこさに神のこゝろもくみて仰がむ

第二百十四

昭憲皇太后御筆御和歌御懷紙

竪一、二七—横一、六五　一通

明治二年正月廿四日歌御會始の時のものにして、御題は「春風來海上」なり、紅と濃縹との重紙を用ひ給へり。

おきつ浪かすみにこめてはるきぬと風もなぎたるよもの海づら

第二百十五

昭憲皇太后御筆御和歌御半切

竪四、六〇—横一、〇〇　一幅

明治七年赤坂離宮に於いて男爵西五辻文仲に賜ひしものにして後年之を獻納せしものなる由、明治十四年九月廿九日なる皇后宮大夫香川敬三の添狀に見ゆ。

文明
大御代の光あまねき文の道ゆきも螢も賴まざりけり

第二百十六

昭憲皇太后御筆御和歌御懷紙

竪一、二七—横一、六四　一通

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

明治三十四年一月十八日歌御會始の時のものにして、紅と萠黄とこの重紙を用ひ給へり。

雪中竹といふことをよめる歌

夜の程のあらしはたえてくれ竹のゆきしづかにもあくるそらかな

第二百十七
昭憲皇太后御筆御和歌御懐紙

竪一、二七―横一、六四　一通

大正三年一月十九日歌御會始の時のものにして、白と萠黄とこの重紙を用ひ給へり。

社頭杉といふことをよめる歌

あらたまのこゝしをちよのはじめにていやさかゆらんいせのかみすぎ

第二百十八
昭憲皇太后御筆御和歌御色紙

竪〇、七一―横〇、六〇　一通

年月を明かにせず、御包紙に「美子上」と御署名あり。

たらちねのみこゝのよさしたがはずてたけくをゝしき君がいさをや

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11

ガラス使用

第二百十九

昭憲皇太后御筆和歌御色紙

竪〇、八二―横〇、七二　一通

古今和歌集巻一に載れる古歌を書し給ひしものなり。

春がすみたつをみ捨てゝ行かりはなゝき里に住やならへる

第二百二十

昭憲皇太后御筆御和歌御短册

竪一、二一―横〇、二〇　二葉

御園生ののの御歌は年月を明かにせず、あらがねのの御歌は御集によれば、明治四十二年の御歌なり。

御園生の菊は盛になりにけりかたへの松もかをる計に

あらがねの土をうがてるたけのこのちからにしるし千よのさかえも

美子

一通

第二百二十一

昭憲皇太后御筆御和歌御懐紙

絹地に極彩色にて御題の心を描きたる美麗なる御懐紙なれどもいづれの時、いかなる折のものなるかを明かにせず。

河早春

よし野やまみねの霞はたちながら河上とほく千どり鳴なり

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

補遺

第九十、靈元天皇宸翰御製和歌御短册の解説の終に、「二葉の中、郭公漸稀の御題は宸翰にあらず」の一句を加へ、又第百二、東山天皇宸翰御製和歌御短册、並に第百二十四、櫻町天皇宸翰御製和歌御短册の解説の終に、各「御題は宸翰にあらず」の一句を加ふ。

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11
ガラス使用

昭和二年十二月十五日發行
宮内省藏版 宸翰集 解說
印刷者 京都市下京區油小路御前通
南入玉本町 小林忠治郎
發行所 京都市下京區油小路御前通
南入玉本町
小林寫眞製版所 電話下六〇二番

国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号 貴箱-11
ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『宸翰集』　請求記号　貴箱-11